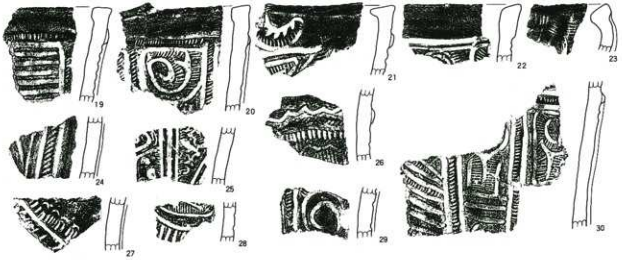
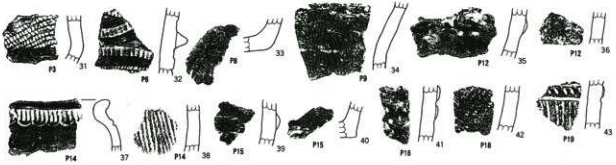
第36図　第５号住居跡出土遺物（8）

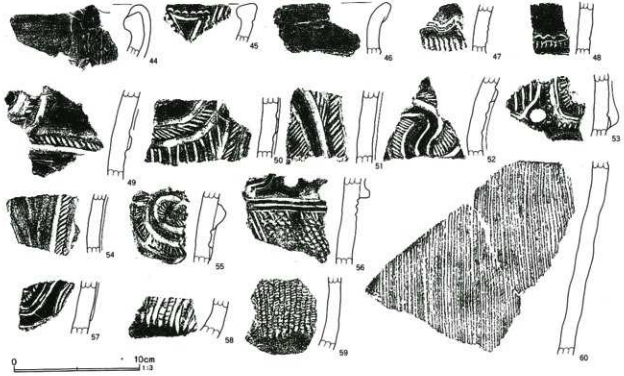
5a 号住炉内



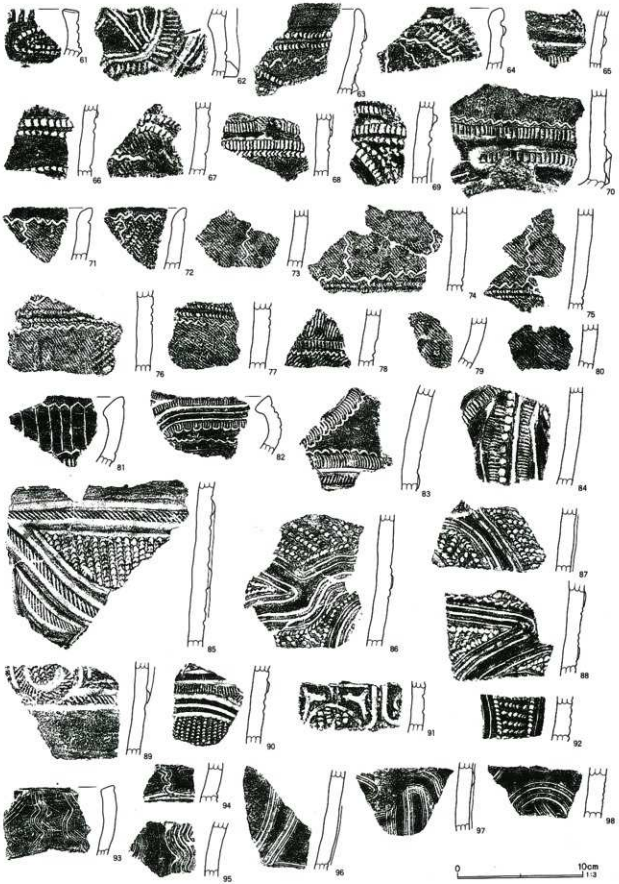
Pit 出土土器



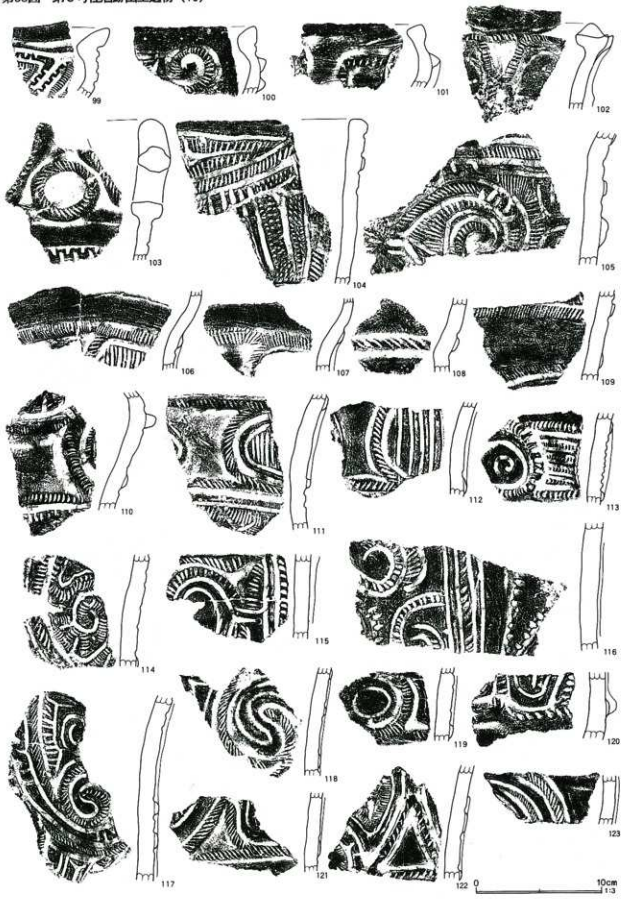
5a 号住覆土



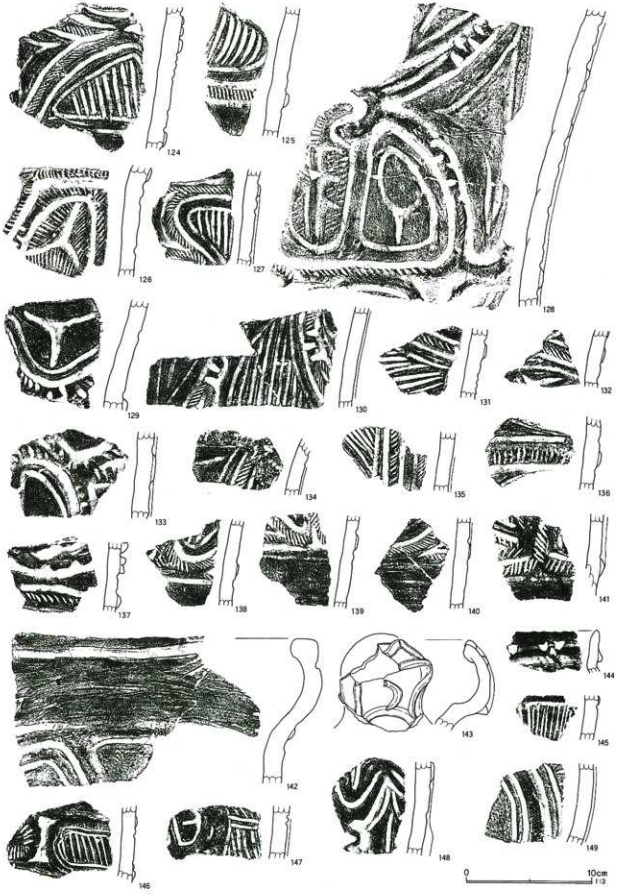
第37図　第５号住居跡出土遺物（9）



第38図　第５号住居跡出土遺物（10）



第39図　第５号住居跡出土遺物（11）



雲母を含む。63は口縁部に勝坂系のモチーフ区画を施すが、２列の結節沈線で施文する等阿玉台系の要素を持つ。区画内はペン先状の結節沈線の小波状文を施文する。66は太細の違いはあるが、２列の結節沈線を使用する点で類似する。64は口縁部破片で、隆帯脇にキャタピラ文を施文し、小波状沈線を沿わせて、区画を二分する小波状沈線を施文する。67は地文単節ＲＬ縄文上に、２本結節沈線で楕円区画を施し、区画内に小波状沈線を施文する。65は２本結節沈線で弧状文を描き、区画隆帯下に縦位の刻み状の爪形文を施す。61、62は阿玉台Ⅱ式、63～67は阿玉台Ⅲ式段階に比定されよう。

68～70はキャタピラ文と三角押文を施文する勝坂系の土器群で、68、69は区画隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施文するもので、新道式段階、70はキャタピラ文に小波状沈線文を沿わせることから、藤内式段階に比定されよう。

71～80は地文縄文上に、小波状沈線とペン先状結節沈線で区画文を施すものである。78以外は同一個体と思われる。71、72はやや内彎しながら若干開く器形で、口唇部が内削状を呈する。口縁部は小波状沈線で、胴部は２列のペン先状結節沈線とそれを挟む２列の小波状沈線で区画し、口縁部から小波状沈線を垂下して器面を縦位分割する。地文は無節Ｌの細かい縄文と、単節ＲＬを縦位施文して部分的に羽根状縄文を構成する。78は小波状沈線とキャタピラ文で胴部を区画し、無節縄文Ｌを横位から斜位施文する。型式比定は難しいが、およそ藤内式段階に位置付けられるものと思われる。

81は内彎して開くキャリパー形深鉢で、内削上の口唇部を呈す。口縁部に鋸歯状沈線とそれを縦位に繋ぐ垂下沈線を組み合わせたモチーフを描き、横位の爪形文で区画する様である。82もキャリパー形深鉢で、口縁部の楕円沈線区画に沿って、蓮華状文を沿わせる。83は胴部破片であるが、隆帯区画に沿って沈線と蓮華状文を施文する。84は沈線に沿って円形刺突文と、幅広の爪形文を施文する。81～83はおよそ藤内式段階に比定されよう。

85～92は区画内の充填文要素として、ペン先状の結節沈線を施文するものである。85、89、90は刻みのある隆帯で区画し、沈線文を沿わせるもので、85、90は弧状区画内に、89は円形区画内に集合ペン先状結節沈線を充填施文する。86～88、92は同一個体で、平行沈線の沿う低隆帯で区画し、区画内にやや間隔を開けたペン先状結節沈線を施文する。91は太沈線区画内に三叉文と結節沈線を施文する。いずれも勝坂式終末に比定されよう。

93～98は櫛歯状条線文でモチーフを描く土器群で、93～95、98は同一個体の可能性が高い。口縁部がやや内彎して開き、頸部が括れ、胴部が張る器形と思われ、波状条線で曲線的なモチーフを描く。96、97は低隆帯で区画し、隆帯脇に半截竹管を束ねた条線文を沿わせる。藤内式から井戸尻式にかけての段階に位置付けられよう。

99～141は刻みを施す隆帯で区画、モチーフを施文し、隆帯脇に沈線及び縁取り状の爪形文を沿わせる構成の土器群である。勝坂式終末期に比定される土器群である。99～101はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、99は口唇部が外反し、半肉彫り状沈線で区画を施し爪形文で縁取る三叉文を施文する。区画沈線には交互刺突文を施す。100、101は口唇部が内削状の角頭状を呈し、外反は弱くなる。口縁部文様帯には刻みを施す隆帯で、渦巻状モチーフを施文する。

102～104は円筒形深鉢の口縁部破片で、102は口唇部上端が幅広の平坦面を形成し、円形の瘤状突起を持つ。この突起を起点として口縁部無文帯に、「X」状隆帯文が垂下する。口唇部外端及び隆帯上には刻みを施す。103は及頭の山形把手に、大きな円形の透かしを施すものであり、縁取りの隆帯には刻みを施す。口縁部は、交互刺突を施す平行沈線で区画する。104は明瞭ではないが、口縁部文様帯を持つものと思われ、沈線の弧状区画内に粗い爪形文で縁取られる三叉文を施文する。胴部は縦位構成の区画文を沈線で施し、余白内に刺突文や爪形文を施す。

105～141は胴部破片である。105～108は彎曲して

開く無文の口縁部を持つ深鉢で、105は刻みを施す隆帯で渦巻文を施文するが、モチーフの余白には爪形文を施文する。106、107は刻みを施す隆帯で楕円区画を施し、集合沈線を充填施文する。109～113も段区画を施すもので、隆帯脇に沈線を、区画内に集合沈線を施文する。113は楕円区画の隅に、沈線渦巻文を施文する。

114～119は沈線の沿う隆帯や、2本沈線で渦巻状のモチーフを施文するものである。隆帯上には刻みを施し、2本沈線間にも刻み状の爪形文を施す。また、部分的に交互の刺突文を施して、爪形文で縁取る場合もある。114、117は区画内に渦巻文を縦位に連ねるモチーフ構成で、115、116は縦位区画から相互に逆巻きの渦巻文を配する構成を採る。118は隆帯と沈線が巴文状に入り組み、119は円形状文を施文する。

120～141は曲線、楕円、三角状の区画を施し、区画内に集合沈線や、爪形文で縁取る三叉文を施文するものである。122、126は爪形文で縁取る三叉文、129は沈線の三叉文を施文する。128は縦位区画から棘状のモチーフを隆帯で施文し、先端部が蛇口状を呈する。区画内の渦巻文は沈線の先端部が三叉文を構成する。区画隆帯には部分的に交互刺突を施す。130の区画隆帯文上にも、交互刻みを施す。129、133、134、137～141等は区画内に過度の装飾を施さないもので、沈線のモチーフを充填施文する傾向が強くなる。

142～157はモチーフ構成がより沈線文化する土器群である。爪形文や隆帯上の刻みを施す割合も少なくなる。142は内彎する無文の口縁部が開く深鉢で、胴部は低隆帯で区画するが、過度な装飾はない。143は球状の把手と思われ、隆起線でモチーフを描くが、全体構成は不明である。144は口縁部の区画隆帯に、交互刺突文を部分的に施す。145～149は刻みを施さない隆帯で区画し、沈線文を沿わせ、区画内に沈線文を施文する構成を採る。

150～157は沈線でモチーフを描く土器群である。150は円筒形深鉢で、口唇内端が突出し、口唇上端が平坦面を形成する。数本の交互刺突を施す沈線で縦位区画を行い、区画内に上下対向する対弧状文を描き、区画内に集合沈線を施文する。また、対弧状文の間には、円形文内に十字状のモチーフを構成する単位文を施文する。151は頸部の区画隆帯間に斜位の細沈線を施す。152～154は沈線間に交互刺突を施す沈線で区画を行うもので、153は区画内に三叉文を施文する。

155～157は沈線のみでモチーフを描くもので、155は縦位区画文内に集合沈線を、156は渦巻文と三叉文を組み合わせたモチーフを描く。

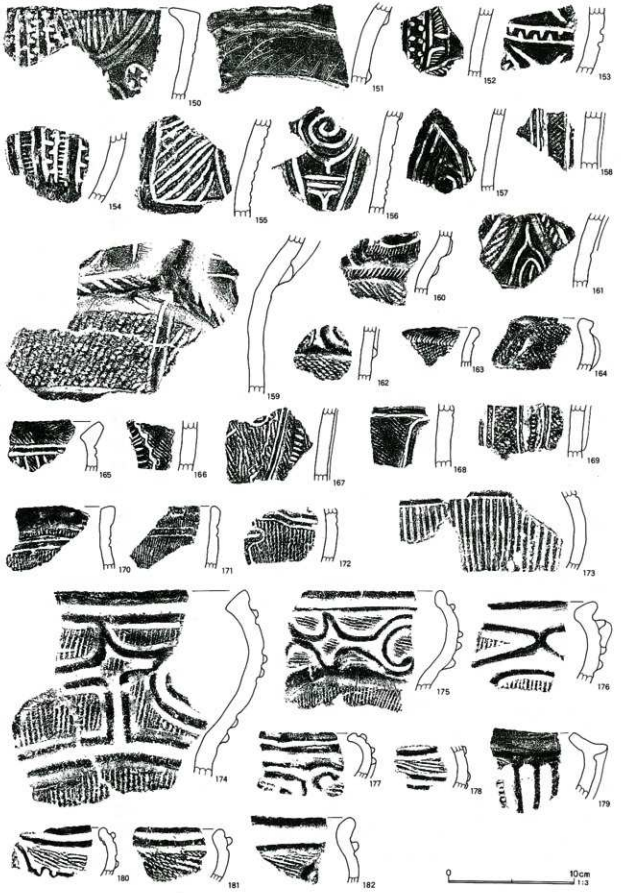
158～172は隆帯上、胴部、地文に縄文や撚糸文を施文する土器群である。158は垂下する低平な隆帯上に単節ＲＬの細かい縄文を施文する。159はキャリパー形深鉢で、隆帯区画の口縁部文様帯を持ち、三叉文等のモチーフを描く。胴部は平行沈線で十字状の区画を行い、地文に０段多条縄文ＲＬを施文する。区画の２本沈線間は磨消縄文状となる。160、162は胴部に０段多条縄文ＲＬを縦位施文する。161は区画隆帯上に単節ＲＬ縄文を施し、区画内に沈線渦巻文を施文する。

163は単節ＬＲ地文上、口縁部の区画線としてペン先状結節沈線を施文する。164はキャリパー形に開く口縁部破片で、縦長の瘤状貼付文を施し、全面に単節ＲＬを施す。165はキャリパー形深鉢の口縁部破片で、口唇部が外反する。全面に地文縄文を施文し、平行沈線で区画を行う。縄文は不鮮明であるが無節Ｌと思われ、口縁部では縦横施文による羽状状の効果を出している。166は無節Ｌ地文上に、連続爪形文と小波状沈線文を施文する。167は低平な隆帯で区画し、隆帯脇には平行沈線と小波状文、爪形文を沿わせ、地文に単節ＲＬ縄文を施文する。168は地文無節Ｌ地文上に平行沈線でモチーフを描く。地文縄文は間隔を開けて縦位施文する。169は地文単節ＲＬ縄文上に、刻みを施す隆帯と、平行沈線が垂下する。

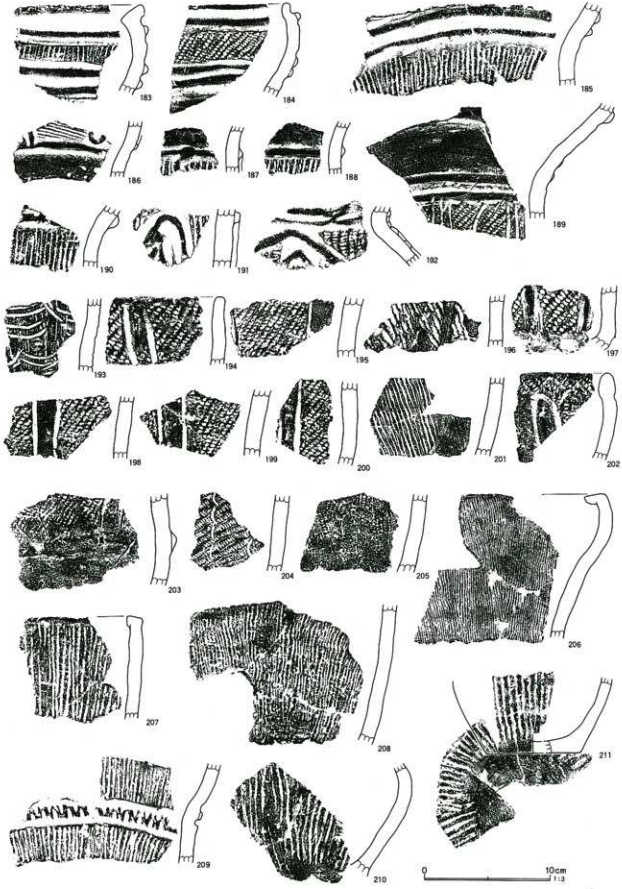
170～172は地文に撚糸文を施文するもので、いずれも頸部がやや括れ、胴部が張る器形を呈する。頸部は平行沈線で区画し、172は胴部に半截竹管の重複施文による平行沈線で垂下モチーフを描く。地文撚糸文は、いずれも撚糸Ｌである。

縄文施文系土器でも、163、164、166、167は大木

第40図　第５号住居跡出土遺物（12）



第41図　第５号住居跡出土遺物（13）



式との影響関係が窺われ、勝坂式ではおよそ藤内式段階の可能性が高い。また、他の土器群は井戸尻式から加曽利E式初頭段階にかけての位置付けが想定される。

173は胴部に集合沈線を縦位に施文することから、曽利系の要素が考えられる。

174～202は加曽利E式系の土器群である。174～184は内彎する口縁部が開くキャリパー形深鉢の口縁部破片である。174、175は頸部文様帯を持たず、口縁部に、閉塞する2本隆帯で横S字状文とそれを連結する十字状モチーフを施文する。174の口唇部は内削状を呈し、175はやや丸みを帯びた口唇部が立つ器形を呈する。地文は撚糸文Lを174は縦位に、175は口縁部横位、胴部縦位に施文する。

176は口縁部のモチーフがX状に連結する部分があり、地文に撚糸文Lを縦位施文する。177は口縁部が強く屈曲し、179は口唇部が強く内彎し、平坦面を形成する。口縁部文様帯内に、3本の隆帯が垂下して文様帯を分割する。180はS字状文の連結隆帯に交互刺突文を施す。地文は0段の撚糸1である。181、182は撚糸Lである。以上、およそ加曽利EⅠ式古段階に比定される土器群である。

183、184は口縁部の内彎傾向がやや弱くなり、区画隆帯も低平化している。183はやや間隔を開けた撚糸Lを、184は単節RLを縦位施文する。184は頸部無文帯を持ち、186～198も頸部無文帯を持つ。186の口縁部文様帯内には円形貼付隆帯を施文する。地文は0段撚糸1である。185、190は頸部無文帯を持たずに、地文撚糸Lを施文する。187～189は頸部無文帯を持ち、187は隆帯の懸垂文、189は沈線懸垂文を垂下する。地文は187、188は撚糸L、189は単節RLである。以上、185、190を除いて、およそ加曽利EⅠ式の新段階に位置付けられるものと思われる。

191は胴部の連結隆帯で、屈曲部分に渦巻文を持つ。192は頸部で屈曲し、胴部に文様帯を持つ浅鉢である。2本隆帯のモチーフを描き、地文に単節縄文RLを施文する。

193は連弧文系土器で、条線地文上に多条沈線で単位の細かい連弧文を描く。

194～202は磨消縄文を施文する土器群である。194は疑口縁状の口縁部から2本沈線間を無文とする磨消懸垂文を垂下する。195、197、198～200は同様に2本沈線間を無文とする磨消懸垂文が垂下する胴部破片で、197は底部付近の破片である。地文はいずれも単節RLである。

196、201は沈線文を施文せずに、磨消文のみを施文するものである。196は0段多条縄文RL、201は0段撚糸rである。

202は吉井城山系の逆U字状磨消懸垂文を施文し、地文縄文単節RLを口縁部で横位、胴部で縦位に施文する。以上、196、201を除いて、加曽利EⅢ式古段階、202はEⅢ式の新段階に位置付けられよう。

203～219は地文のみの土器群である。203～205は縄文施文で、203はやや算盤玉状を呈する底部である。単節RLを施文する。204は0段多条縄文RLと結節回転施文の綾繰文を垂下する。205は底部付近の破片で、単節RLを施文する。

206～214は撚糸文を施文する土器群である。206は口縁部が彎曲して開くキャリパー形深鉢で、口唇部内端が突出する。口縁部から全面に細かな撚糸Rを施文する。207は円筒形深鉢の口縁部で、口唇部内端が角状に張り出す。地文は粗い撚糸Lを施文する。208は底部付近の破片で、撚糸Rを施文する。209は胴部破片で、頸部の隆帯区画に交互刻みを施す。地文は撚糸Lである。210は胴部が張る深鉢の底部破片で、間隔の粗い撚糸Lを施文する。212、213は胴部破片、214は底部破片で、何れも撚糸Lを施文する。

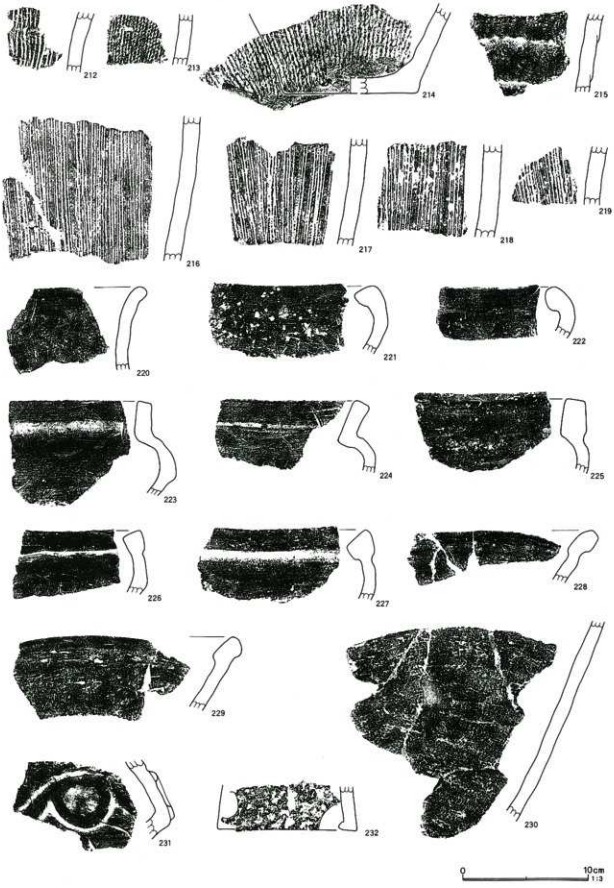
211は縦位の沈線文を施文する底部破片で、曽利系の要素が見られる。

215は無文の胴部破片であるが、輪積み痕が襞状整形痕として残る。

216～219は条線文を施文する深鉢の胴部破片である。撚糸文との置換関係が想定される。

220～222は深鉢の無文口縁部破片で、220は外反す

第42図　第５号住居跡出土遺物（14）



る器形、221、222は内彎して開く器形である。

223～230は浅鉢である。223～227は口縁部が「コ」字状に屈曲する浅鉢で、口唇部が角頭状のものと肥厚するものとが存在する。228、229は口縁部が大きく開く皿状の浅鉢である。230は浅鉢の胴部破片である。

231は口縁部が「く」字状に屈曲して開く浅鉢で、胴部に低隆帯による円形状文を連結するモチーフを描く。

232は円形や半円形の透かしを持つ器台である。推定底径11.5cm、現存高4cmを測る。

第5号住居跡出土石器（第43図1～第46図46）

第5号住居跡からは、多量の石器が出土している。大半は土器片と同様に第5c号住からの出土であるが、明確に所属遺構を確定し得ない状況である。

石鏃（1）

1点のみの出土である。1は黒曜石製の石鏃で、先端部と両脚部を欠損する。長さ1.7cm、幅1.3cm、厚さ0.5cm、重さ1.1gを測る。

剥片（2、3）

2は黒曜石製の剥片で、エッジを刃部として使用している可能性がある。長さ2.1cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.1gを測る。

掻器（3～5、36～38）

3はチャート製の掻器で、長さ2.6cm、幅2.5cm、厚さ0.8cm、重さ4.4gを測る。4はチャート製の掻器で、ラウンドに刃部を形成する。長さ3.5cm、幅4.3cm、厚さ0.9cm、重さ10.3gを測る。

5は摘みの付く横型の石匙状の掻器で、両サイドを欠損する。長さ3.4cm、幅3.4cm、厚さ0.8cm、重さ8.3gを測る。

36～38はいずれも円礫からの剥片で、礫表との間に形成されたエッジを刃部にするものである。36は結晶片岩製で、長さ6.4cm、幅7.5cm、厚さ1.4cm、重さ69.6gを測る。37は安山岩製で、丸い刃部を形成する。長さ5.3cm、幅5.4cm、厚さ1.7cm、重さ48.2gを測る。38は安山岩製で、長さ3.8cm、幅5.3cm、厚さ1.5cm、重さ34.5gを測る。

尖頭器状石器（7、9）

7は粘板岩製の尖頭器状石器、基部を欠損し、先端部のみ現存する。長さ7.8cm、幅3.5cm、厚さ1.8cm、重さ30.5gを測る。9は緑泥片岩製で、長さ6.1cm、幅2.4cm、厚さ0.8cm、重さ11.7gを測る。

楔状石器（8、10、11）

幅の狭い打製石斧で、刃部を磨くものもある。8は頁岩製で、長さ8.7cm、幅2.3cm、厚さ1.5cm、重さ37.1gを測る。10は緑色片岩製で、長さ7.5cm、幅1.7cm、厚さ0.8cm、重さ15.8gを測る。11は刃部を欠損するが緑色片岩製で、長さ5.7cm、幅2.5cm、厚さ0.7cm、重さ10.3gを測る。

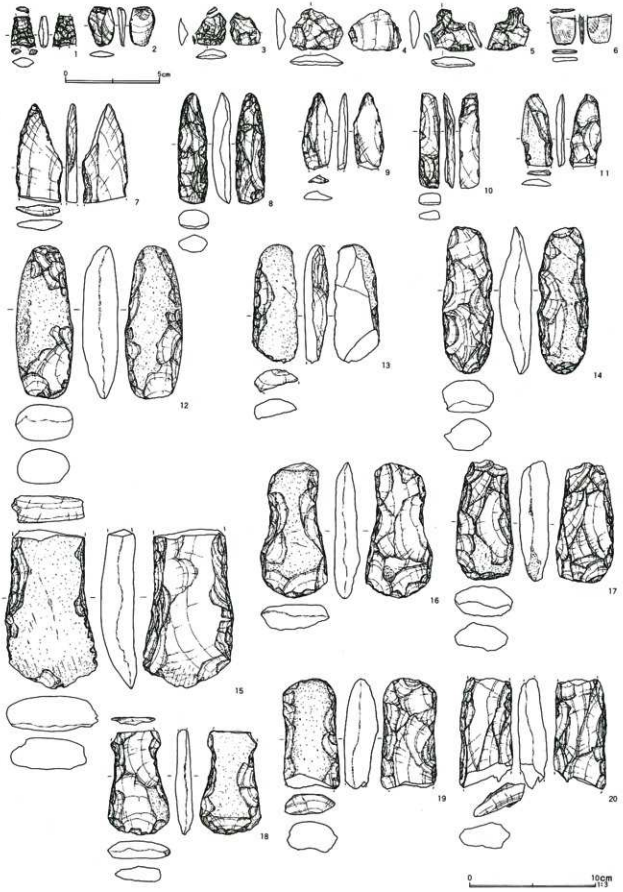
磨製石斧（6、12、13）

6は小形の磨製石斧で、刃部のみ現存する。緑簾石片岩製で、長さ2.3cm、幅1.9cm、厚さ0.4cm、重さ2.5gを測る。12、13は調整剥離と敲打で整形した後に、磨きをかけるものである。12は安山岩製で、長さ12.1cm、幅4.5cm、厚さ2.8cm、重さ207.3gを測る。13は安山岩製で、長さ9.3cm、幅3.6cm、厚さ1.9cm、重さ76.9gを測る。

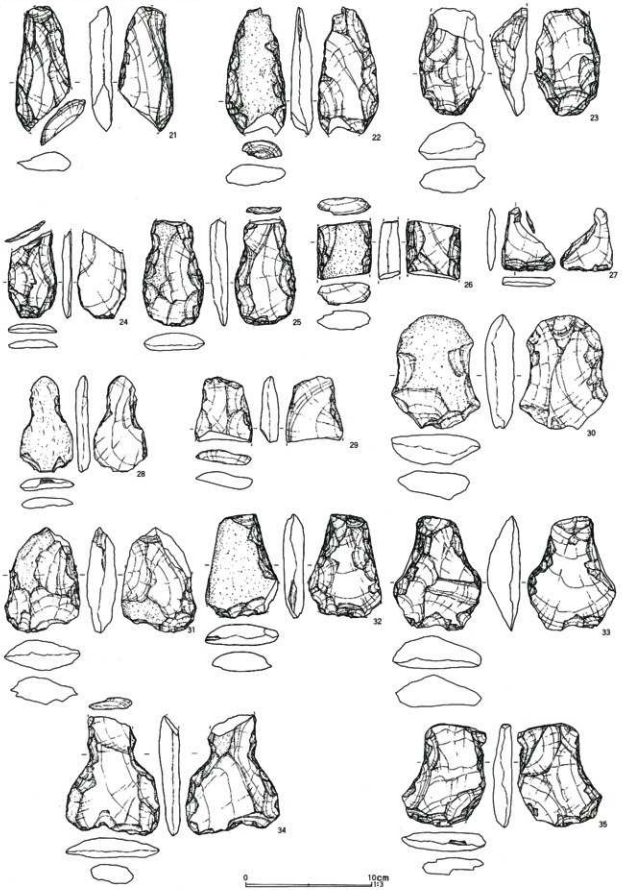
打製石斧（14～35）

様々な形態が存在するが、14～25は胴部がやや括れる撥形の打製石斧である。14は頁岩製で、長さ11.5cm、幅4.1cm、厚さ2.3cm、重さ143.2gを測る。15は頁岩製で、頭部を欠損する。長さ12.6cm、幅7.3cm、厚さ2.8cm、重さ322.1gを測る。16は頁岩製で、長さ10.7cm、幅5.3cm、厚さ2.1cm、重さ128.1gを測る。17は緑色片岩製で、長さ9.4cm、幅4.6cm、厚さ2.4cm、重さ148.8gを測る。18は頭部を欠損するが、砂岩製で、長さ8.3cm、幅4.9cm、厚さ1.4cm、重さ65.5gを測る。19は頁岩製で、長さ8.7cm、幅4.4cm、厚さ2.7cm、重さ130.8gを測る。20は刃部と頭部を欠損するが、緑色片岩製で、長さ8.4cm、幅4.1cm、厚さ2.4cm、重さ105.7gを測る。21は刃部を欠損するが、結晶片岩製で、長さ9.6cm、幅4.4cm、厚さ1.8cm、重さ81.7gを測る。22は刃部の一部を欠損するが、頁岩製で、長さ10.1cm、幅4.8cm、厚さ1.7cm、重さ94.1

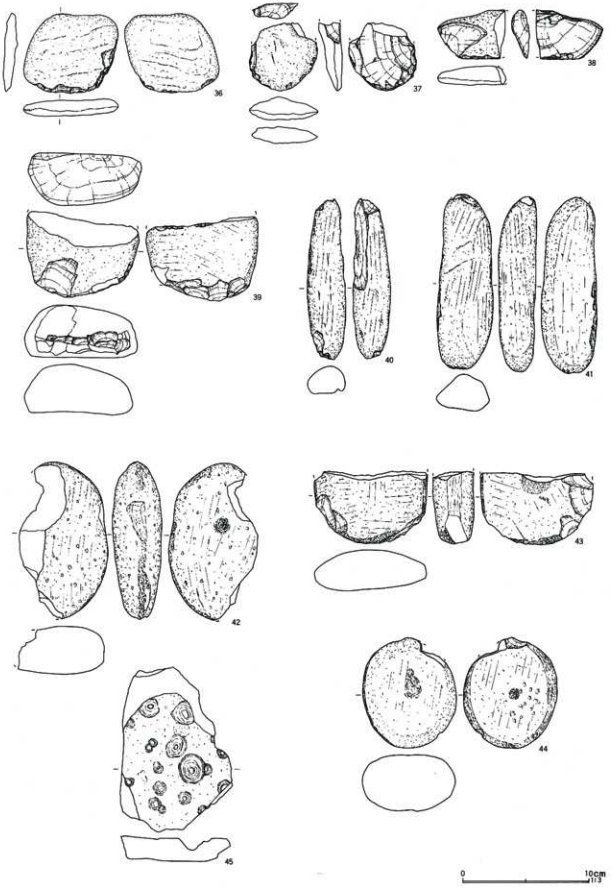
第43図　第５号住居跡出土遺物（15）



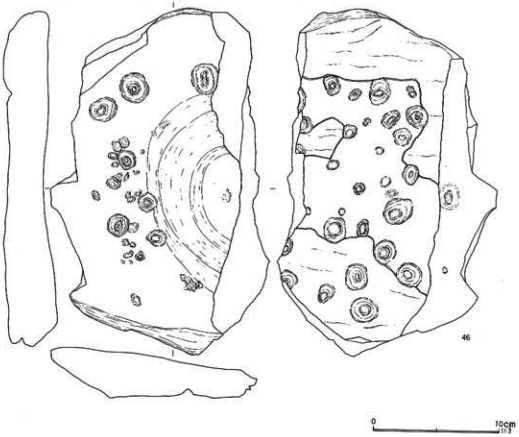
第44図　第５号住居跡出土遺物（16）



第45図　第５号住居跡出土遺物（17）



第46図　第５号住居跡出土遺物（18）



ｇを測る。23はやや厚身で、頭部を欠損するが、頁岩製で、長さ8.5cm、幅5.2cm、厚さ2.9cm、重さ127.3ｇを測る。24は頭部を欠損するが、緑色片岩製で、長さ6.9cm、幅3.8cm、厚さ0.8cm、重さ22.9ｇを測る。25は頭部を一部欠損するが、砂岩製で、長さ8.3cm、幅4.9cm、厚さ1.4cm、重さ61.4ｇを測る。

26、27は短冊形の打製石斧で、26は胴部のみ現存する。砂岩製で、長さ4.7cm、幅4.3cm、厚さ1.7cm、重さ51.9ｇを測る。27は扁平な刃部のみ現存し、石英脈岩製で、長さ5.1cm、幅4.2cm、厚さ0.7cm、重さ12.9ｇを測る。

28、34は胴部の括れが強い撥形の打製石斧である。28は結晶片岩製で、長さ7.6cm、幅4.2cm、厚さ1.1cm、重さ30.3ｇを測る。34は頭部を欠損し、刃部が直線状となるが中央部がやや括れる。頁岩製で、長さ9.5cm、幅7.4cm、厚さ1.6cm、重さ113.1ｇを測る。

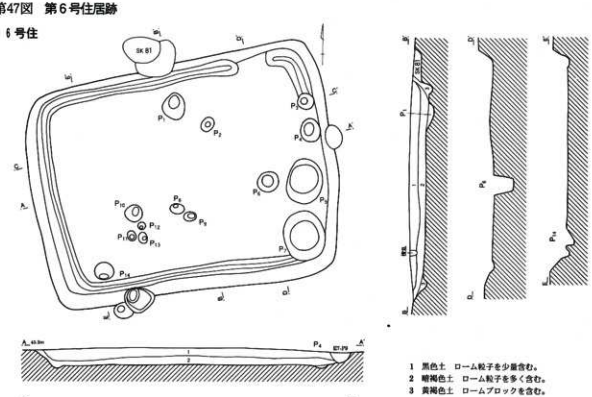
29～33、35は刃部の開きが大きく、寸詰まりの撥形打製石斧である。厚身のものが目立つ。29は刃部を欠損するが、やや寸詰まりの撥形と思われ、頁岩製で、長さ5.2cm、幅4.6cm、厚さ1.5cm、重さ36.4ｇを測る。30は厚身で、刃部の調整が粗い。頁岩製で、長さ8.9cm、幅6.9cm、厚さ2.8cm、重さ165.2ｇを測る。31は頭部を一部欠損するが、頁岩製で、長さ8.3cm、幅5.8cm、厚さ2.4cm、重さ103.5ｇを測る。32は頁岩製で、長さ8.2cm、幅5.8cm、厚さ1.6cm、重さ94.5ｇを測る。

33は頁岩製で、長さ9.0cm、幅7.1cm、厚さ2.6cm、重さ138.8ｇを測る。35は頁岩製で、長さ8.1cm、幅6.7cm、厚さ1.5cm、重さ85.1ｇを測る。35は刃部欠損後、刃部再生の調整剥離を行っており、掻器として使用している可能性がある。長さ8.1cm、幅6.7cm、厚さ1.5cm、重さ85.1ｇを測る。

礫器（39）

39は敲石状の礫器で、背面に研磨痕が見られること

第47図　第６号住居跡



から、砥石等の転用品と思われる。刃部は鈍く、器体が半割された様な状態である。長さ6.7cm、幅8.9cm、厚さ4.2cm、重さ332.8ｇを測る。

磨石（42～44）

礫面に定型的になるまで磨きをかけるもの と、礫形を留めるものとがある。大半が欠損品である。42は閃緑岩製で、長さ12.2cm、幅7.1cm、厚さ3.9cm、重さ413.2ｇを測る。43は閃緑岩製で、長さ5.8cm、幅9.1cm、厚さ3.3cm、重さ247.5ｇを測る。44は閃緑岩製で、長さ8.7cm、幅7.5cm、厚さ4.5cm、重さ422.7ｇを測る。

敲石（40、41）

棒状の長楕円礫の端部に敲打痕がある敲石である。40は緑色片岩製で、長さ12.6cm、幅3.1cm、厚さ1.7cm、重さ104.1ｇを測る。41は砂岩製で、長さ13.7cm、幅4.5cm、厚さ3.1cm、重さ218.5ｇを測る。

石皿（45、46）

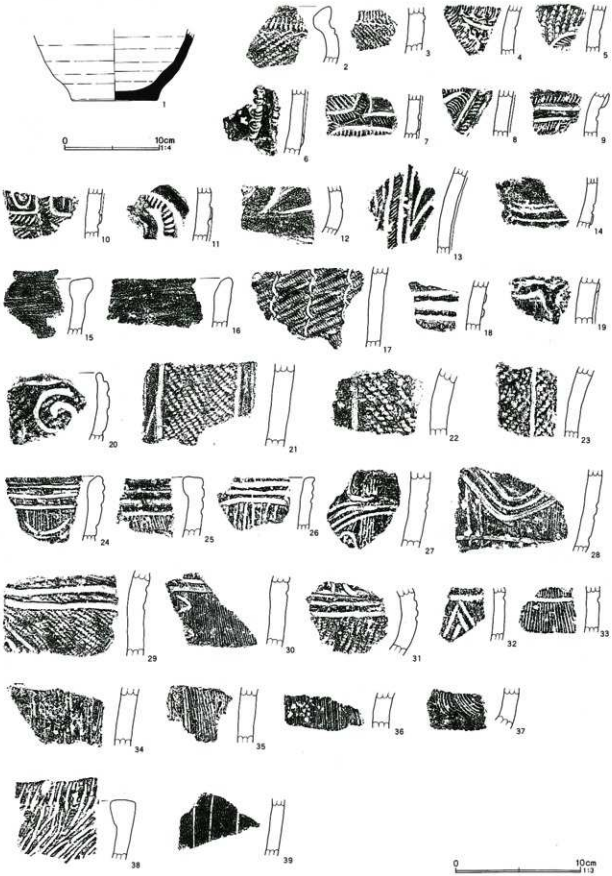
45は緑泥片岩製で、長さ13.0cm、幅9.0cm、厚さ1.5cm、重さ268.2ｇを測る。46は緑泥片岩製の石皿で、両面に多数の窪穴を有する。長さ 27.3cm、幅17.5cm、厚さ4.5cm、重さ2766.4ｇを測る。

第６号住居跡（第47図、第48図）

Ｅ－６～７区にかけて位置する。第81号土壙と重複するが、住居跡の方が新しい。

東西方向に細長いほぼ長方形を呈し、長径4.88ｍ×短径3.64ｍ×深さ0.23ｍを測る。壁溝は東壁以外で全周し、大小の不規則なピットが14本検出された。ピットの深さはＰ１＝10cm、Ｐ２＝17cm、Ｐ３＝8cm、Ｐ４＝7cm、Ｐ５＝13cm、Ｐ６＝31cm、Ｐ７＝13cm、Ｐ８＝11cm、Ｐ９＝6cm、Ｐ10＝6cm、Ｐ11＝11cm、Ｐ12＝6cm、Ｐ13＝7cm、Ｐ14＝14cmを測る。床面はほ

第48図　第６号住居跡出土遺物



ぼ平坦であり、炉、竈等の付属施設は検出されなかった。覆土が他の縄文時代住居跡の覆土と異なり、しまりが弱く、また、ピットが不揃いであったりする。多時期の遺物が混在することを考慮して、住居跡状竪穴遺構として認識した。

出土遺物は縄文土器を中心とするが、平安時代の須恵器、中・近世陶磁器の小破片も出土している。

1は須恵器の甕の底部破片である。内外面に自然釉がかかる。約3割ほどが現存し、底径9.2cm、現存高7.2センチを測る。

2～17は縄文時代中期の勝坂系土器群である。2は口縁部が彎曲して開くキャリパー形深鉢の口縁部破片で、地文に単節縄文ＬＲを施文し、口縁部の区画に幅広の爪形文を施文する。爪形文には小波状沈線が沿う。3は胴部破片であるが、2とほぼ同じ構成を採り、小波状沈線が細かく、地文の単節ＲＬ縄文も細かい。4は区画沈線脇に蓮華状文を沿わせ、区画内に三叉文を施文する。5は区画内充填要素に集合ペン先状結節沈線を施文する。6は刻みを施さない隆帯で区画し、隆帯脇を蓮華状文で縁取る。以上、施文の特徴から、ほぼ藤内式段階に位置付けられるのと思われる。5はやや新しくなる可能性が高い。

7～13は刻みを施す隆帯区画に沈線が沿う構成の土器群で、井戸尻式段階に位置付けられよう。7、10は隆帯区画内に集合沈線や沈線の渦巻文を施文する。8は区画内に爪形文を施す。11は隆帯の渦巻状区画を施し、12は沈線のみを施文する。13は縦位隆帯脇の沈線に交互刺突のアクセントを付ける。14は低平な隆帯脇に平行沈線を沿わせる。

15、16は無文の口縁部破片である。17は0段多条縄文ＲＬ上に結節回転の綾繰文を垂下する。

18～37は加曽利Ｅ系の土器群である。18、19は区画文に隆帯を使用する加曽利ＥⅠ式である。

20は口縁部に沈線の「の」字状渦巻文を施文し、地文に単節ＲＬを縦位施文する。21、22は2本沈線間を無文にする磨消懸垂文を施文する胴部破片で、21、22は単節ＬＲ縄文、23は単節ＲＬ縄文を施文する。およそ、加曽利ＥⅢ式古段階に比定される。

24～34は連弧文系土器群である。24～26は口縁部破片であるが、口唇部の形状が異なる。何れも口縁部を3本沈線で区画し、24、25は地文に条線を、26は撚糸Ｌを施文する。27、28は条線地文上に連弧文を施文する。29は地文単節ＬＲ縄文上に連弧文を施し、胴部を3本沈線で区画する。胴部下半の条線地文上に、30は蛇行沈線懸垂文を、32は連弧文を施文する。31は胴部が球形状となるが、胴部の沈線区画より上に沈線の弧状モチーフを施文する。33、34は胴部を沈線で区画している。35、36は条線のみ施文する深鉢の胴部破片で、連弧文土器の胴部破片の可能性が高い。37は底部付近の破片であるが、蛇行条線を施文する。以上加曽利ＥⅡ式の後半からＥⅢ式の古段階にかけて位置付けられよう。

38は曽利系の土器で、口唇内端の突出が弱く、施文される沈線文も雑な施文となる。曽利Ⅲ式に比定されよう。

39は3本の沈線が垂下する、後期堀之内Ⅱ式土器である。

2　掘立柱建物跡

今回の調査区内からは、多数のピットが検出された。その所属時期は縄文時代、平安時代、中･近世の各時代にわたり構築されたものと把握された。従って、ここでは、これらのピットが単独の存在として構築されたのではなく、有機的な関係にあったことを前提として、可能な限りの組列を把握することに努めた。中には、ピットの配列が完全ではないものも存在するが、可能性のある組列を掘立柱建物跡として認識した。調査区内には、中･近世の堀跡と認識される溝状遺構も存在していることから、掘立柱建物跡が存在する時代的な蓋然性は高いものと思われる。

掘立柱建物跡は、調査区の西端と東端に纏まって存在する。西端ではC～D－2～3区、東端ではE～F－8～9区にかけて、重複しながら存在する。

第1号掘立柱建物跡（第49図）

D～E－8区に位置する。第2号掘立柱建物跡と同軸方向に重複し、第3･4号掘立柱建物跡に隣接する。

建物規模は、2間（3.88m）×2間（3.71m）の側柱建物である。主軸方向はN－43°－Eである。遺物は検出されなかった。

第2号掘立柱建物跡（第49図）

E－8区に位置する。第1号掘立柱建物跡と同軸方向に重複し、第3・4号掘立柱建物跡に隣接する。

建物規模は、2間（3.82m）×3間（4.29m）の側柱建物である。主軸方向はN－42°－Eである。遺物は検出されなかった。

第3号掘立柱建物跡（第50図）

E－8～9区に位置する。第2号掘立柱建物跡と重複し、第4号掘立柱建物跡と同軸方向に重複する。

建物規模は、2間（4.71m）×3間（5.74m）の側柱建物である。主軸方向はN－1°－Wである。遺物は検出されなかった。

第4号掘立柱建物跡（第51図）

E－8～9区に位置する。第2号掘立柱建物跡と重複し、第3号掘立柱建物跡と同軸方向に重複する。

建物規模は、2間（4.05m）×3間（5.94m）の側柱建物である。主軸方向はN－5°－Eである。遺物は検出されなかった。

第5号掘立柱建物跡（第52図）

F－8区に位置する。1棟のみ単独で離れて存在しているが、第1・2号掘立柱建物跡と主軸方向を同じにする。建物規模は、2間（3.29m）×2間（3.94m）の側柱建物である。主軸方向はN－32°－Eである。遺物は検出されなかった。

第6号掘立柱建物跡（第53図）

C－2～3、D－2区に位置する。第3号住居跡、第7号掘立柱建物跡と重複する。

建物規模は、2間（5.35m）×3間（6.76m）の総柱建物である。桁間は2.28m前後で安定しているが、梁間はP1～P5が2.29mで桁間と同じであるが、P5～P9は3.06mで、間隔が異なっている。主軸方向はN－61°－Eである。遺物は検出されなかった。

第7号掘立柱建物跡（第54図）

C－2～3区に位置する。第1号住居跡、第6号掘立柱建物跡と重複する。

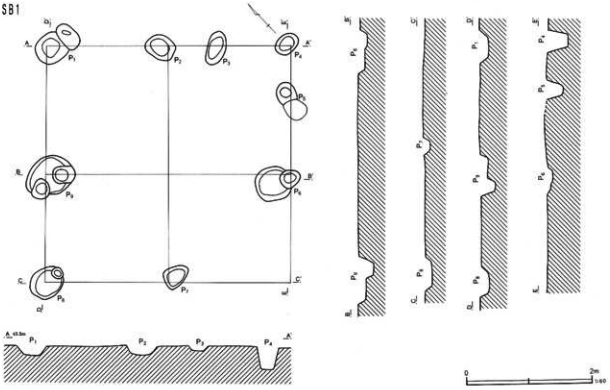
建物規模は、3間（5.02m）×3間（5.65m）の側柱建物である。主軸方向はN－21°－Wである。遺物は検出されなかった。

第8号掘立柱建物跡（第52図）

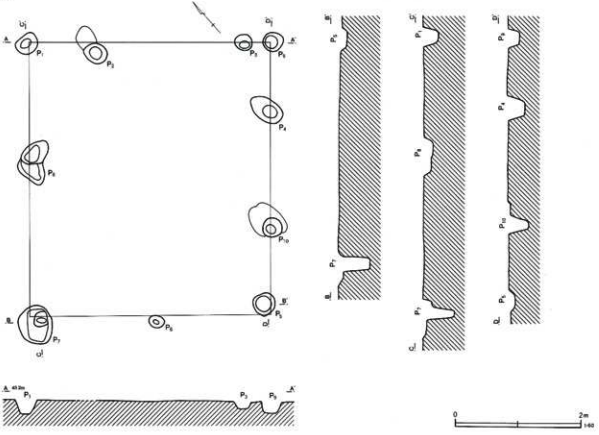
D－2～3区に位置する。桁行方向が調査区外にある。建物規模は、2間（4.94m）×3間の側柱建物と思われる。主軸方向はN－1°－Wである。遺物は検出されなかった。

第49図　第１号・第２号掘立柱建物跡

SB1

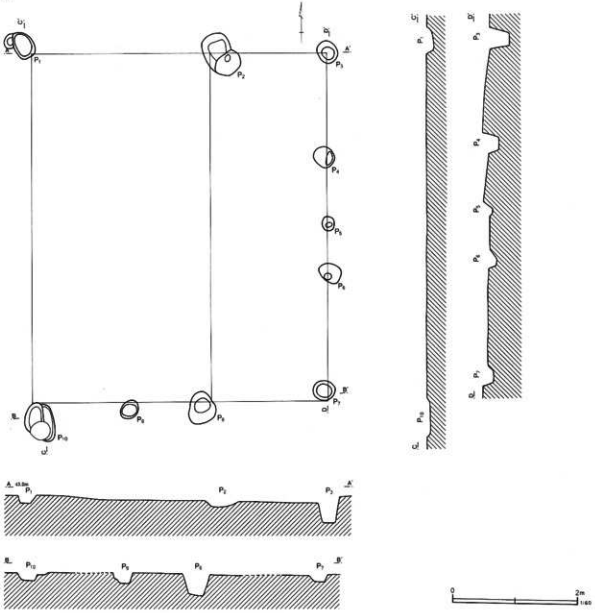


SB2



第50図　第３号掘立柱建物跡

SB3

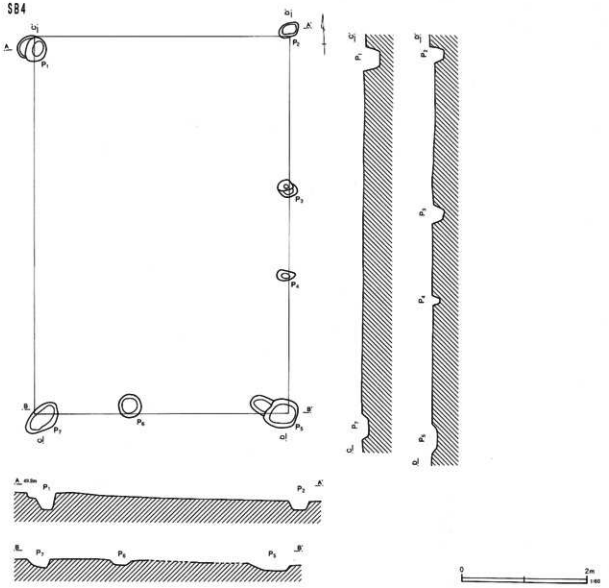


SB1	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
径(cm)	46	46	55	39	30	32	42	60	80
深さ(cm)	18	12	7	33	25	7	10	13	24

SB2	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
径(cm)	34	39	30	56	35	26	61	50	35	32
深さ(cm)	24	32	11	26	9	24	50	13	18	28

SB3	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10
径(cm)	45	73	35	35	20	38	26	50	40	46
深さ(cm)	13	10	34	13	14	9	5	34	16	14

第51図　第４号掘立柱建物跡

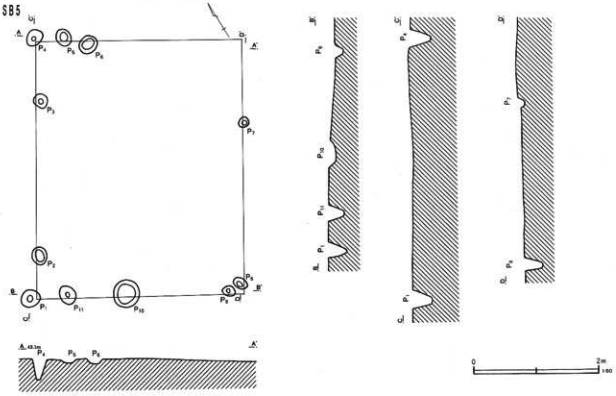


SB4	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7
径(cm)	38	34	32	31	57	36	62
深さ(cm)	25	14	18	13	10	5	12

SB5	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11
径(cm)	30	28	24	30	28	28	18	24	20	43	30
深さ(cm)	31	9	28	33	6	8	7	28	12	10	25

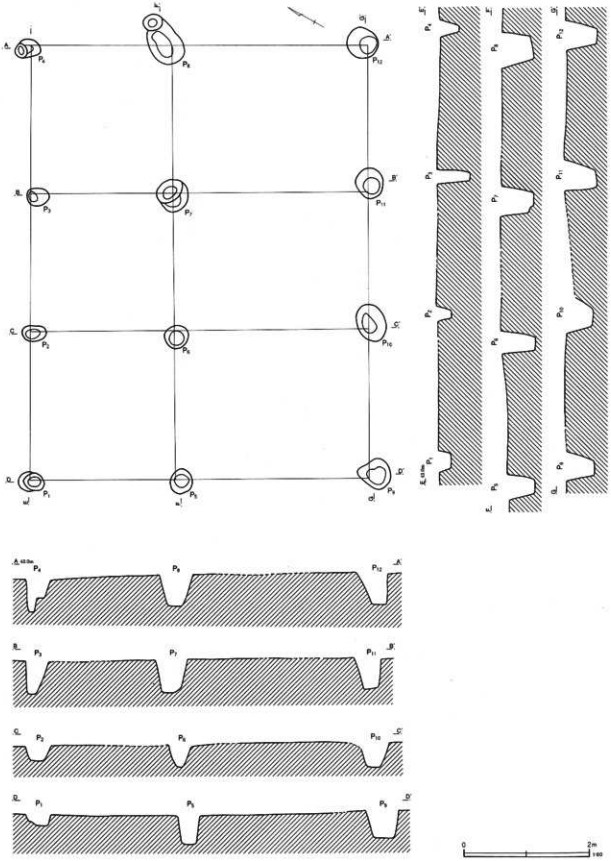
SB8	P1	P2	P3	P4
径(cm)	44	54	72	54
深さ(cm)	32	38	46	56

第52図　第５号・第８号掘立柱建物跡



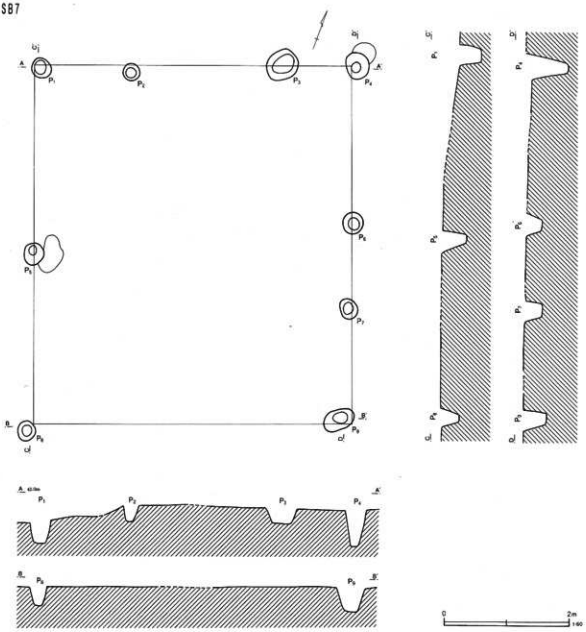
第53図　第６号掘立柱建物跡

SB6



第54図　第７号掘立柱建物跡

SB7



SB6	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12
径(cm)	41	39	34	40	39	38	51	49	54	58	48	50
深さ(cm)	18	23	51	51	43	53	53	49	45	41	50	49

SB7	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9
径(cm)	34	27	53	42	34	34	34	32	53
深さ(cm)	34	26	24	57	39	23	26	29	37

3　集石土壙

集石土壙は調査区の西側半分、縄文時代の住居跡が分布する区域内のおよそ内側で、住居跡と重複しながら存在する。今回の調査区内では、11基の集石土壙を検出した。

第1号集石土壙（第55図、第57図1、2）

C－2区に位置する。第3号住居跡と重複し、住居跡の覆土中に構築される。従って、住居跡より新しい。

プランはほぼ円形を呈し、長径1.47m×短径1.41m×深さ0.24mを測る。覆土上層に焼礫が集中し、礫の総重量は3.6kgを測る。

出土遺物は土器の細片で、2点のみを図示した。1、2とも被熱しており、平行沈線の文様を描く。時期不詳で、前期の可能性もある。

第2号集石土壙（第55図）

C－2区に位置する。中・近世のピットと重複し、土壙北西側に攪乱を受ける。

プランは楕円形を呈し、長径1.7m×短径1.5m×深さ0.23mを測る。土壙の中央部より東側に焼礫が集中し、覆土の上層部から出土している。礫の総重量は2.2kgを測る。遺物は出土していない。

第3号集石土壙（第55図）

C－2区に位置する。中・近世のピットと重複し、土壙東側と南側に攪乱を受ける。

プランはほぼ円形を呈し、長径2.24m×短径2.18m×深さ0.59mを測る。覆土の上層部に大形の焼礫を含む礫群が集中し、礫の総重量は25.8kgを測る。遺物は出土していない。

第4号集石土壙（第55図、第57図3～17）

C－2区に位置する。第1号住居跡と重複し、住居跡の覆土中に構築される。従って、住居跡より新しい。

プランはほぼ円形を呈し、長径1.58m×短径1.52m×深さ0.47mを測る。比較的大きな礫群を中心として、底面近くから覆土上層まで焼礫が詰まっている。礫の総重量は33.6kgを測る。

出土遺物は、中期勝坂式の土器片である。3は円筒形深鉢の口縁部破片で、刻みを施す隆帯で縦位区画を行い、区画内に沈線のパネル状区画を施し、集合沈線を充填施文する。4～7、10も胴部破片で、沈線区画内に爪形文や三叉文を施文する。8、9は無文の口縁部が内彎して開く深鉢で、胴部に隆帯区画のモチーフを展開する。9は頸部から鍔上の隆帯が垂下して区画し、三叉文を区画内に施文する。11～14は地文のみ施文する土器群で、11は撚糸L、12～14は単節RLを縦位施文する。15、16は無文の胴部破片である。

第5号集石土壙（第55図、第57図17、18）

C－3区に位置する。プランはほぼ円形を呈し、長径2.05m×短径1.88m×深さ0.53mを測る。底面付近に大きな焼礫2個を並べ、その上にやや小形の焼礫を廃棄した様な出土状態であった。礫の総重量は15kgを測る。

出土遺物は土器の細片で、2点のみを図示した。17は胴部破片で、縦位の爪形文を横列に施文する。18は被熱して器面が荒れているが、単節RL縄文を縦位施文する。阿玉台Ⅲ式段階に比定されよう。

第6号集石土壙（第55図、第57図19、20）

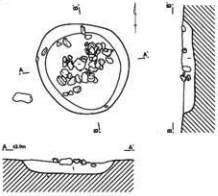
C－4区に位置する。中・近世のピットと重複し、土壙東側に攪乱を受ける。

プランはほぼ円形を呈し、長径1.76m×短径1.64m×深さ0.41mを測る。底面に大きな礫を1点据え置き、その上に礫を廃棄するが、覆土上層に比較的大きな焼礫が集中し、礫の総重量は10.8kgを測る。

出土遺物は土器の細片で、2点のみを図示した。19は刻みを施す隆帯を垂下して文様帯を区画し、隆帯脇に沈線を沿わせる。沈線脇には爪形文を施文する。20は櫛歯状条線で蛇行懸垂文を施文する。勝坂式終末に比定されよう。

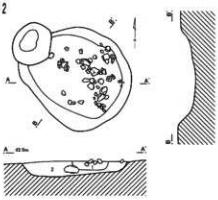
第55図　集石土壙（1）

SS1



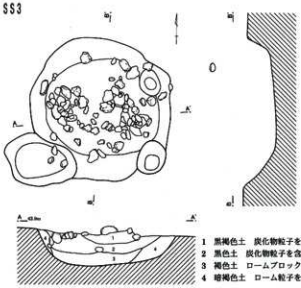
1　黒色土　ローム粒子を含む。炭化物粒子を少量含む。礫は上層にある。

SS2



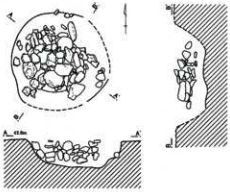
1　黒色土　炭化物粒子を含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を含む。

SS3

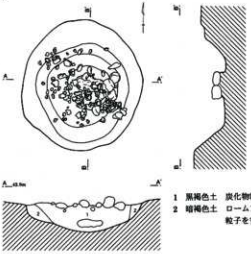


1　黒褐色土　炭化物粒子を含む。
2　黒色土　炭化物粒子を含む。
3　褐色土　ロームブロックを多く含む。
4　暗褐色土　ローム粒子を多く含む。

SS4

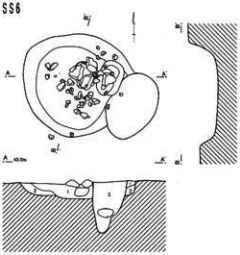


SS5



1　黒褐色土　炭化物粒子を含む。
2　暗褐色土　ロームブロック及びローム粒子を多く含む。

SS6

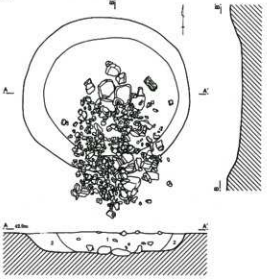


1　暗黒褐色土　多量の炭化物粒子と少量のローム粒子を混入する。
2　黄褐色土　黒色土粒子やロームブロックを混入する。
3　黒褐色土　ローム粒子を混入する。しまりは弱い。

0　1m　1:100

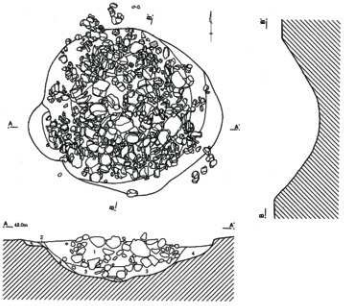
第56図　集石土壙（2）

SS7



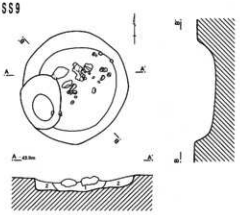
1　黒褐色土　炭化物粒子を含む。
2　暗褐色土　ローム粒子を含む。

SS8



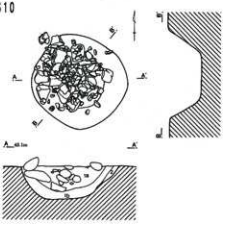
1　暗黒褐色土　黒色土を主体にし、炭化物粒子を多量に均一に含む。しまりは極めて弱い。
2　黒色土　炭を主体にしており、黒色土を僅かに混入する。
3　黒色土　1層に類似するが焼土小ブロック粒子を混入する。
4　黒褐色土　黒色土を主体にするが、炭化木、焼土ブロック、ロームブロックを多量に混入する。
5　黄褐色土　ソフトロームを主体にし、黒色土を少量含む。

SS9



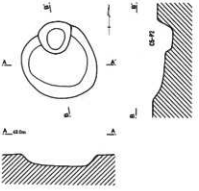
1　黒色土　炭化物を少量含む。
2　暗褐色土　ロームブロックを含む。

SS10

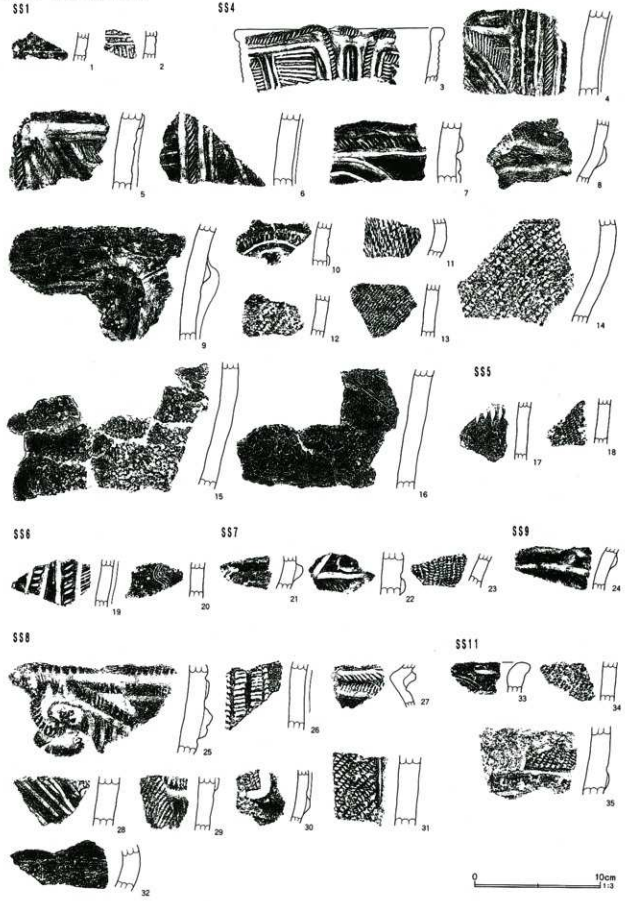


1a　暗褐色土　粒子の細かい均一な黒色土を主体にする。
1b　暗褐色土　僅かにローム粒子を混入する。
2　黄褐色土　ソフトロームを主体にし、黒色土を少量混入する。

SS11



第57図　集石土壙出土遺物



第７号集石土壙（第56図、第57図21～23）

Ｃ－４区に位置する。プランはほぼ円形を呈し、長径2.64ｍ×短径2.47ｍ×深さ0.35ｍを測る。底部に大形の礫数点を敷き詰め、その上に小形の礫を中心にして廃棄する。礫の分布は、土壙の範囲とずれており、南側へ大きくずれる。礫の総重量は44.2kgを測る。

出土遺物は土器の細片で、３点のみを図示した。21は口縁部下端の区画隆帯部分の破片である。21は文様帯の下端部分であり、区画隆帯と、沈線のモチーフが描かれる。隆帯上には細かな刻みを施す。23は縄文を施文する底部付近の破片で、地文は単節ＲＬである。勝坂式終末に比定されよう。

第８号集石土壙（第56図、第57図25～32）

Ｃ－４区に位置する。プランは東西に細長い楕円形を呈し、長径3.05ｍ×短径2.58ｍ×深さ0.65ｍを測る。土壙の底部はすり鉢状を呈する。底面に礫を据え置いた様な状況は見られなかったが、覆土全体に焼礫が含まれており、覆土が焼礫といった様相を呈していた。礫の総重量は259.5kgを測る。

出土遺物は土器片である。25は胴部の横位区画帯下に、隆帯の横Ｓ字状に展開する渦巻文を施文する。隆帯上には結節状の刻みを施し、区画隆帯との接合部には交互刺突文を施す。また、隆帯の渦巻きに沿って、集合沈線文を施文する。26は縦位の区画隆帯に沿って、キャタピラ文とペン先状結節沈線が沿う。27は屈曲する頸部の区画部分で、隆帯に矢羽状の刻みを施し、隆帯脇に沈線を沿わせる。28は胴部破片で、沈線モチーフを描く。29は文様帯下端部分で、胴部に０段多条縄文ＲＬを横位施文する。32は無文浅鉢の胴部破片と思われる。以上、26は藤内式段階、それ以外は勝坂式終末段階に比定される。

30、31は加曽利Ｅ系の土器群で、30は口縁部文様帯部分、31は胴部懸垂文部分である。縄文原体はいずれも単節ＲＬである。加曽利ＥⅠ式後半か、ＥⅡ式段階に比定されるものと思われる。

第９号集石土壙（第56図、第57図24）

Ｃ－３区に位置する。中･近世のピットと重複し、土壙西側に攪乱を受ける。

プランはほぼ円形を呈し、長径1.75ｍ×短径1.62ｍ×深さ0.24ｍを測る。覆土上層に比較的大きな焼礫が存在するが、量は少ない。礫の総重量は3.9kgを測る。

出土遺物は土器の細片で、１点のみを図示した。24は加曽利ＥⅠ式の口縁部文様帯下端部の破片で、区画隆帯上に部分的に押圧を施す。頸部に無文帯を持つが、口縁部区画隆帯上の押圧手法から、加曽利ＥⅠ式古段階に比定される可能性が高い。

第10号集石土壙（第56図、第57図）

Ｄ－５区に位置する。プランはほぼ円形を呈し、長径1.41ｍ×短径1.35ｍ×深さ0.53ｍを測る。土壙の中央部よりやや西側の覆土中に、比較的集中して礫が出土している。礫の総重量は40.99kgを測る。

第11号集石土壙（第56図、第57図33～35）

Ｃ－５区に位置する。中･近世のピットと重複し、土壙北側に攪乱を受ける。

プランはほぼ円形を呈し、長径1.24ｍ×短径1.16ｍ×深さ0.18ｍを測る。覆土上層にまばらに焼礫が存在していた。実質的な記録を残せなかったが、集石土壙として扱った。

出土遺物は土器の細片で、３点のみを図示した。33は口縁部破片で、円筒形深鉢の口縁部と思われる。34は胴部破片で、撚糸Ｌを施文する。35は加曽利Ｅ式の口縁部文様帯破片で、口縁部の区画内に単節ＲＬを施文する。口縁部文様帯部分の残りが少ないため、型式の認定は難しいが、器壁が厚いこと、屈曲が少ないことから、加曽利ＥⅡ～Ⅲ式に比定されるものと思われる。

4　土壙

調査区内から104基の土壙が検出された。土壙の分布は、縄文時代住居跡の分布範囲内に大半が認められる。時期も縄文時代所産のものが多いと思われるが、古代、中･近世の土壙も存在する可能性が高い。しかし、明瞭に区分することが困難であるため、ここでは土壙を一括して取り扱う。

第１号土壙（第58図）

Ａ－２区に位置する。第２号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径0.99ｍ×短径0.6ｍ×深さ0.17ｍを測る。底面は船底状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第２号土壙（第58図、第59図１、２）

Ａ－２区に位置する。第１号土壙と重複する。プランは長楕円形で、長径1.03ｍ×短径0.63ｍ×深さ0.14ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。１は縄文地文上に斜位の隆帯が垂下し、太い沈線が沿う。２は口縁部破片で、刻みを施す隆帯と沈線が施文される。

第３号土壙（第58図）

Ａ－２区に位置する。約北半分が調査区外にあたる。プランは楕円形で、長径0.70ｍ×短径0.65ｍ×深さ0.15ｍを測る。底面は平坦面で、壁は比較的直に立ち上がる。

第4号土壙（第58図）

Ｂ－２区に位置する。プランはほぼ円形で、長径0.62ｍ×短径0.53ｍ×深さ0.07ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第5号土壙（第58図、第59図３～10）

Ｂ－２区に位置する。プランは長楕円形で、長径1.30ｍ×短径0.65ｍ×深さ0.20ｍを測る。底面は凹凸があり、壁は直に近く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。３～10は加曽利Ｅ系の土器群である。３は口縁部破片で、他は同部破片である。４は３本沈線の懸垂文、５～７は磨消懸垂文、８は縄文、９は条線を施文し、10は無文の口縁部破片である。

第６号土壙（第58図、第59図11～20）

Ｂ－２区に位置する。第７号土壙と重複する。プランは不正円形で、長径1.23ｍ×短径0.93ｍ×深さ0.15ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。11～13、15～18は加曽利Ｅ系の土器群で、14、19、20は曽利系の土器群である。11は口縁部文様帯破片、12は連弧文土器、13～18は懸垂文を持つ胴部破片である。14、19は胴部懸垂文間に沈線文を施文し、20は内彎して開く口縁部に沈線文を施文する。

第７号土壙（第58図、第59図21～25）

Ｂ－２区に位置する。第６・８号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径1.07ｍ×短径0.90ｍ×深さ0.18ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。21は勝坂系土器で、他は加曽利Ｅ系土器群である。21は区画隆帯脇にキャタピラ文とペン先状結節沈線を施文し、区画内に集合ペン先状結節沈線を施文する。22は沈線懸垂文が垂下し、他は無文土器である。

第８号土壙（第58図、第59図26）

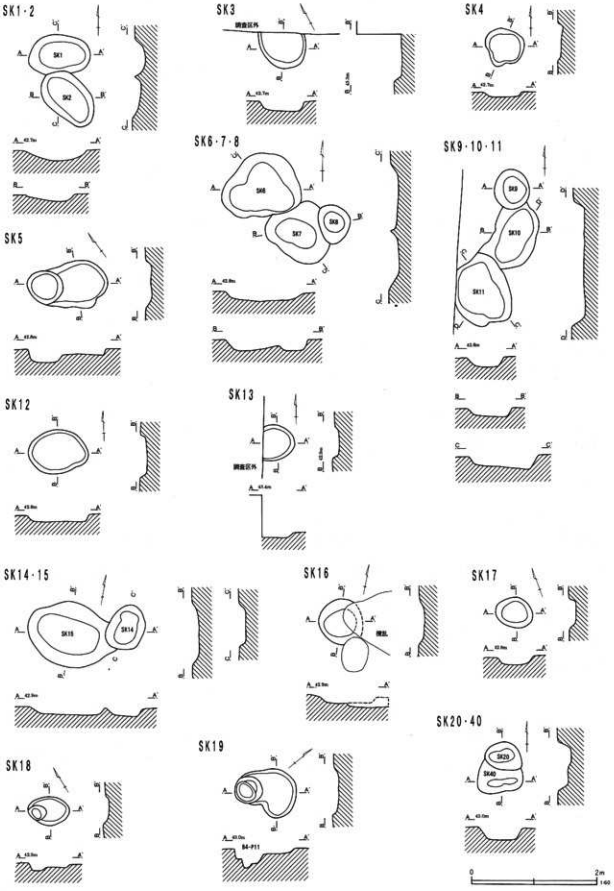
Ｂ－２区に位置する。第７号土壙と重複する。プランはほぼ円形で、長径0.60ｍ×短径0.48ｍ×深さ0.17ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。26は縄文を施文する破片で、単節ＲＬを施文する。

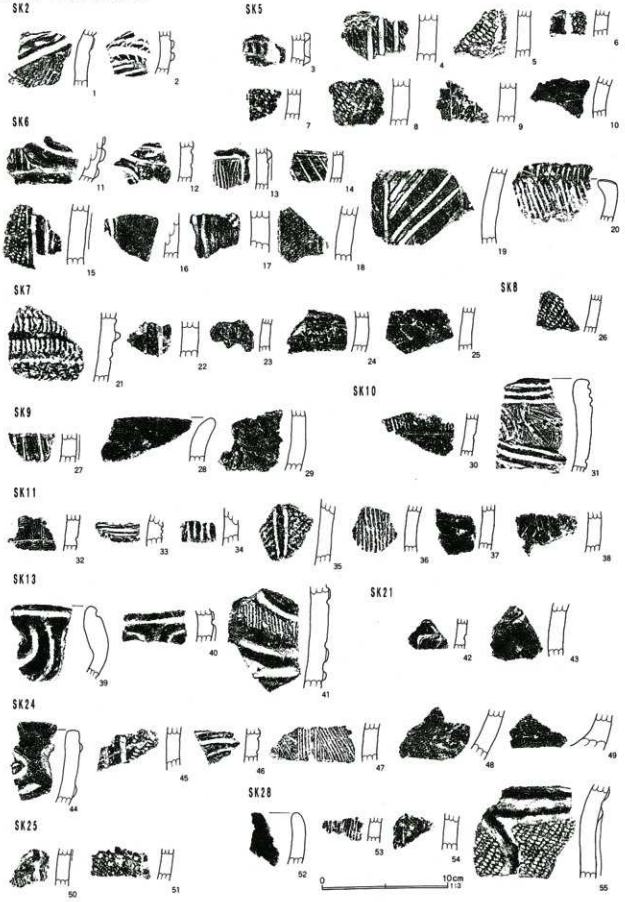
第９号土壙（第58図、第59図27～29）

Ｂ－２区に位置する。第10号土壙と重複する。プランは円形で、長径0.63ｍ×短径0.57ｍ×深さ0.16ｍ

第58図　土壙（1）


SK1・2
SK3
SK4
SK5
SK6・7・8
SK9・10・11
SK12
SK13
SK14・15
SK16
SK17
SK18
SK19
SK20・40
0
2m
1:60

第59図　土壙出土遺物（1）



を測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。27、28は勝坂系土器群、29は加曽利E系土器である。27は沈線の沿う隆帯が垂下し、28は無文の口縁部が開く。29は一部に縄文を施文する。

第10号土壙（第58図、第59図30、31）

B－2区に位置する。第9・11号土壙と重複する。プランは長楕円形で、長径1.02m×短径0.70m×深さ0.18mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。両者とも加曽利E系土器群で、30は撚糸Lを施文する胴部破片、31は連弧文土器の口縁部破片で、地文に蛇行条線を施す。

第11号土壙（第58図、第59図32～38）

B－2区に位置する。第10号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径1.12m×短径0.90m×深さ0.25mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。32～38は加曽利E系土器群である、32条線地文を横位沈線が区画する。33は胴部の区画沈線、34は縦位沈線、35は磨消懸垂文を施文する。36は撚糸Lを施文し、37、38は無文土器である。

第12号土壙（第58図）

B－2区に位置する。プランは長楕円形で、長径0.97m×短径0.70m×深さ0.12mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第13号土壙（第58図、第59図39～41）

B－2区に位置する。プラン西側の一部が調査区外にあたる。プランは楕円形で、長径0.57m×短径0.50m×深さ0.10mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。39は曽利系の重弧文系土器の口縁部破片で、40は加曽利E系土器の口縁部破片である。41は胴部破片で、撚糸L地文上に隆帯の渦巻文を連結するモチーフを描く。

第14号土壙（第58図）

B－2～C－2区にかけて位置する。第15号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径0.70m×短径0.55m×深さ0.12mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第15号土壙（第58図）

B－2～C－2区にかけて位置する。第14号土壙と重複する。プランは長楕円形で、長径1.50m×短径1.03m×深さ0.13mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第16号土壙（第58図）

C－2区に位置する。中・近世ピットと重複し、東側に攪乱を受ける。プランは円形で、長径0.72m×短径0.39m×深さ0.10mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第17号土壙（第58図）

C－2区に位置する。プランは円形で、長径0.60m×短径0.48m×深さ0.13mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第18号土壙（第58図）

C－2区に位置する。プランは楕円形で、長径0.65m×短径0.45m×深さ0.13mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

第19号土壙（第58図）

C－2区に位置する。中・近世ピットと重複する。プランは不正円形で、長径0.97m×短径0.60m×深さ0.09mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第20号土壙（第58図）

C－3区に位置する。第40号土壙と重複する。プラ

ンは楕円形で、長径0.55m×短径0.43m×深さ0.22mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第21号土壙（第60図、第59図42、43）

B－3～B－4区にかけて位置する。中･近世のピットと重複し、東側部分に攪乱を受ける。プランは長楕円形で、長径1.75m×短径0.95m×深さ0.10mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。42は蛇行沈線を施文し、条線文を施す。43は無文土器で、胎土に雲母を含む。

第22号土壙（第60図）

C－2～D－2区にかけて位置する。中･近世のピットと重複し、西側に攪乱を受ける。プランは不正円形で、長径0.85m×短径0.72m×深さ0.19mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第23号土壙（第60図）

D－2区に位置する。中･近世のピットと重複し、東側に攪乱を受ける。プランは長楕円形で、長径1.55m×短径0.76m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第24号土壙（第60図、第59図44～49）

B－3区に位置する。中･近世の室状遺構で、出土遺物は流れ込みである。プランは長楕円形の主体部に、円形の入り口部が付く。主体部の長径1.88m×短径1.47m×深さ1.64m、入り口部の径は0.70mを測る。

遺物は土器片が出土している。44～49は加曽利E系の土器群で、44は楕円区画文を持つ口縁部破片である。45は磨消懸垂文を持つ胴部破片、46は連弧文系土器の胴部破片である。47は条線文を施文する胴部破片、48、49は底部付近の無文土器である。

第25号土壙（第60図、第59図50、51）

B－3区に位置する。プランは楕円形で、長径0.66m×短径0.55m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。50～51は加曽利E系の土器群で、50は条線地文上に隆帯懸垂文が垂下する。51は単節LR縄文を施文する。

第26号土壙（第60図）

B－3区に位置する。中･近世のピットと重複し、中央部に攪乱を受ける。プランは不整楕円形で、長径1.25m×短径0.55m×深さ0.17mを測る。底面はやや凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

第27号土壙（第60図）

C－3区に位置する。第30号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径1.10m×短径0.63m×深さ0.45mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

第28号土壙（第60図、第59図52～55）

B－3区に位置する。中･近世のピットと重複する。プランは不整円形で、径0.95m×深さ0.32mを測る。底面は船底状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。52～55は加曽利E系の土器群で、52は無文の口縁部破片、53は地文に条線を施文する。54は沈線の懸垂文が垂下し、55は地文単節RL縄文上に、蛇行隆帯を垂下する。

第29号土壙（第60図）

C－3区に位置する。中･近世のピットと重複し、南側部分に攪乱を受ける。プランは長楕円形で、長径1.14m×短径0.35m×深さ0.14mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第30号土壙（第60図）

C－3区に位置する。第27号土壙と重複する。プランは不整円形で、長径1.00m×短径0.95m×深さ0.19mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第31号土壙（第60図、第62図1）

C－3～4区にかけて位置する。第32号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径0.75m×短径0.62m×深さ0.18mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。1は無文の胴部破片である。

第32号土壙（第60図）

C－3～4区にかけて位置する。第31号土壙と重複する。プランは長楕円形で、長径0.50m×短径0.38m×深さ0.15mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第33号土壙（第60図）

C－3区に位置する。第34号土壙と重複し、中･近世のピットに攪乱を受ける。プランは長楕円形で、長径0.86m×短径0.47m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第34号土壙（第60図、第62図2）

C－3区に位置する。第33号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径0.65m×短径0.50m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。2は加曽利E系の口縁部破片で、頸部無文帯を持つ。

第35号土壙（第60図、第62図5～11）

C－3区に位置する。中･近世ピットと多数重複する。プランは不整円形で、長径1.35m×短径1.30m×深さ0.31mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。6は沈線の楕円区画内に集合沈線を施文する勝坂式土器である。5、7～9、11は加曽利E系土器である。5は口縁部破片で、頸部無文帯を持ち、口縁部に楕円区画文を施す。7、8は磨消懸垂文を施文するもので、縄文は7がRL、8はLRである。11は浅鉢の口縁部破片である。10は沈線文を施文する曽利系土器である。

第36号土壙（第60図、第62図12、13）

C－3区に位置する。中･近世のピットと重複し東側に攪乱を受ける。プランは長楕円形で、長径1.54m×短径0.67m×深さ0.11mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。加曽利E系の土器群で、12は条線、13は撚糸Rを施文する。

第37号土壙（第60図、第62図14、15）

C－3区に位置する。プランは円形で、長径0.95m×短径0.90m×深さ0.22mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。14は深鉢の胴部破片で沈線文が垂下する。15は口縁が開く無文の浅鉢の口縁部破片である。

第38号土壙（第61図）

C－3区に位置する。第39号土壙と重複する。プランは円形で、長径0.48m×短径0.47m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第39号土壙（第61図、第62図16、17）

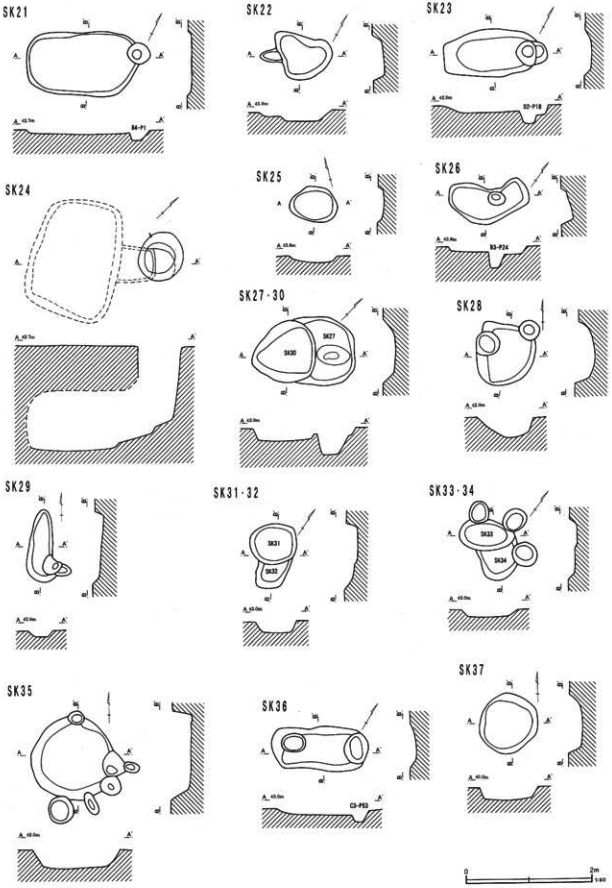
C－3区に位置する。第38号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径0.79m×短径0.50m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。17は勝坂系土器、16は加曽利E系土器で、17は区画隆帯上に刻みを施す。16は隆帯を施文する胴部破片である。

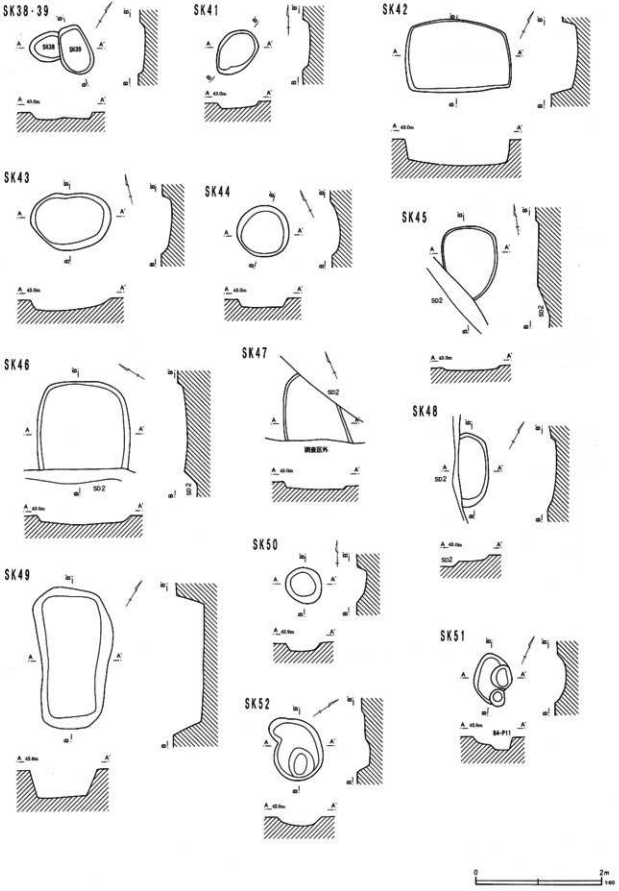
第40号土壙（第58図）

C－3区に位置する。第20号土壙と重複する。プランは長楕円形で、長径0.73m×短径0.34m×深さ0.18mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

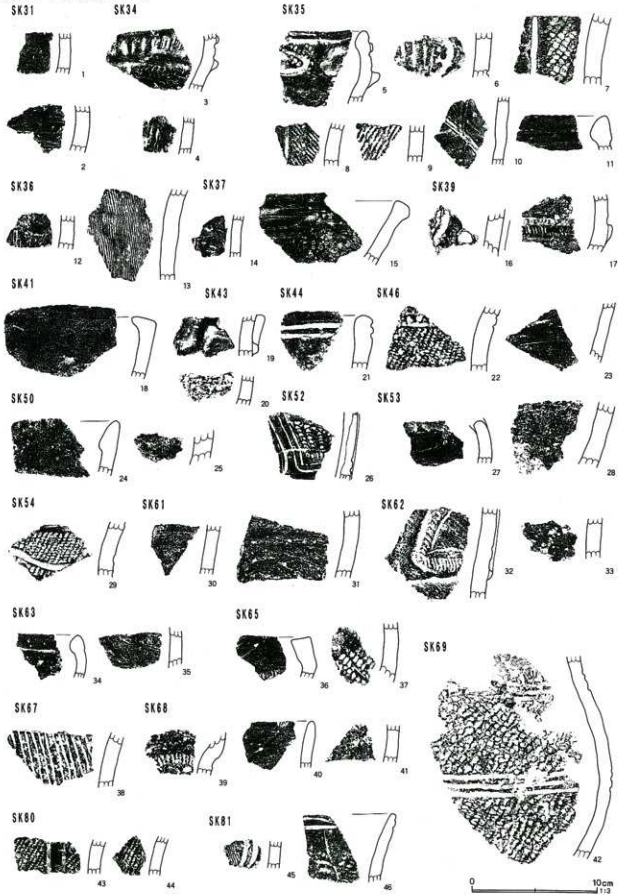
第60図　土壙（2）


SK21
SK22
SK23
SK24
SK25
SK26
SK27・30
SK28
SK29
SK31・32
SK33・34
SK35
SK36
SK37
0
2m
1:60

第61図　土壙（3）


SK38・39
SK38
SK39
SK41
SK42
SK43
SK44
SK45
SD2
SK46
SD2
SK47
SD2
調査区外
SK48
SD2
SD2
SK49
SK50
SK51
SK52
0
2m
1:40

第62図　土壙出土遺物（2）



第41号土壙（第61図、第62図18）

C－3区に位置する。プランは楕円形で、長径0.81m×短径0.56m×深さ0.12mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。18は勝坂系円筒形深鉢の無文の口縁部破片で、口唇部内端が突出する。

第42号土壙（第61図）

D－3区に位置する。プランは長方形で、長径1.65m×短径1.13m×深さ0.42mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第43号土壙（第61図、第62図19、20）

D－3区に位置する。プランは楕円形で、長径1.25m×短径0.88m×深さ0.18mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。19、20は勝坂系の土器群で、19は蛇行する太隆帯を横位に施文する。20は被熱が著しく、器面が荒れている。

第44号土壙（第61図、第62図21）

D－3区に位置する。プランは円形で、長径0.83m×短径0.82m×深さ0.14mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。21は加曽利E系の連弧文土器の口縁部破片で、平行沈線で口縁部を区画する。

第45号土壙（第61図）

D－3区に位置する。第2号溝と重複する。プランは楕円形で、長径1.15m×短径0.85m×深さ0.06mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第46号土壙（第61図、第62図22、23）

D－3区に位置する。第2号溝と重複する。プランは長方形で、長径1.47m×短径1.36m×深さ0.15mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。22は胴部区画の平行沈線に交互刺突を施し、胴部に単節RL縄文を縦位施文する。連弧文土器の可能性が高い。23は無文土器である。

第47号土壙（第61図）

D－3区に位置する。南側が調査区域外にあたり、北側が第2号溝と重複する。プランは長円形で、長径1.07m×短径0.93m×深さ0.16mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第48号土壙（第61図）

D－3区に位置する。第2号溝と重複する。プランは長楕円形で、長径1.15m×短径0.46m×深さ0.27mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第49号土壙（第61図）

B－4区に位置する。プランは長方形で、長径2.20m×短径1.05m×深さ0.50mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第50号土壙（第61図、第62図24、25）

B－4区に位置する。プランは円形で、長径0.60m×短径0.55m×深さ0.15mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。24は無文の口縁部破片で、25は胴部破片である。

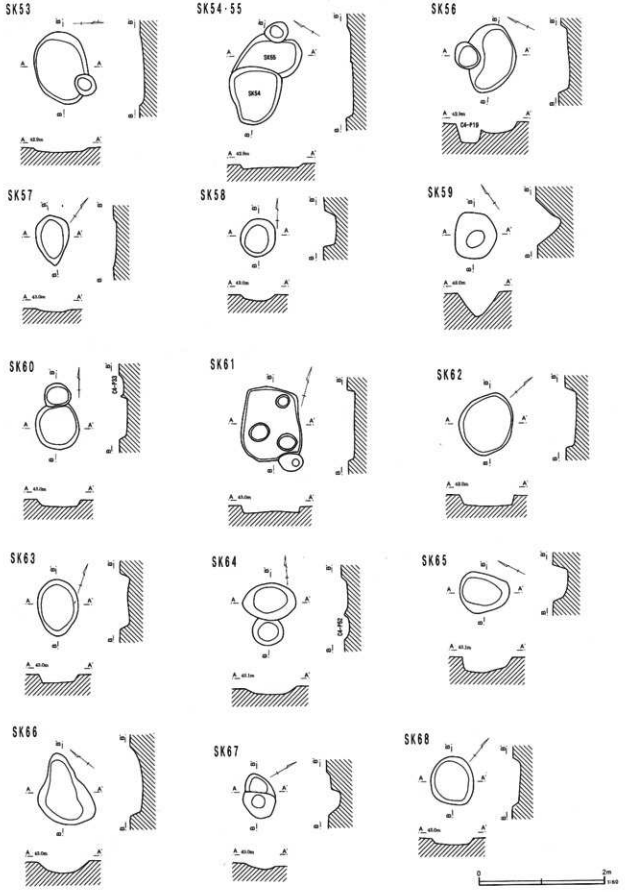
第51号土壙（第61図）

B－4区に位置する。中･近世のピットと重複し、東側に攪乱を受ける。プランは楕円形で、長径0.80m×短径0.60m×深さ0.17mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

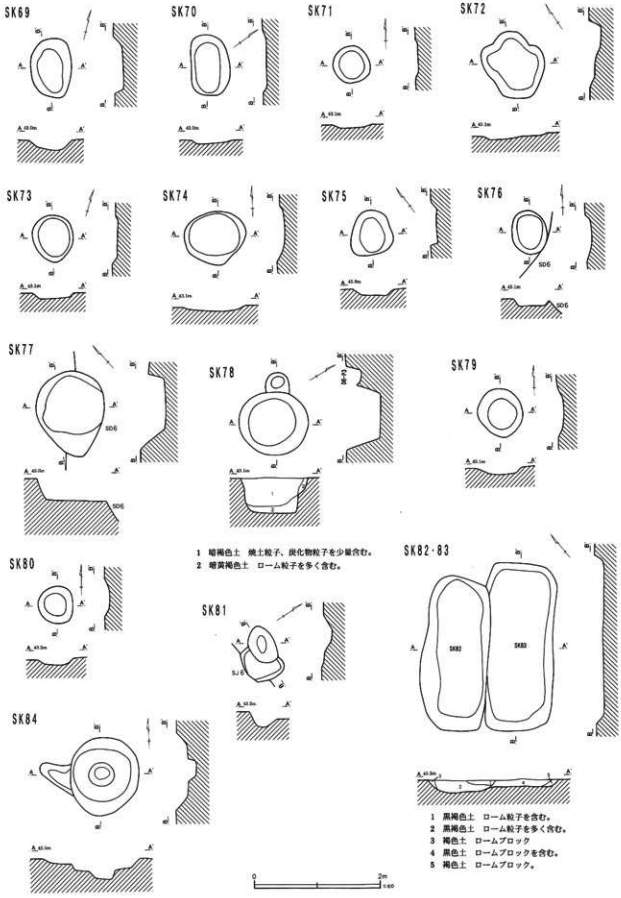
第52号土壙（第61図、第62図26）

B－4区に位置する。プランは不整円形で、長径1.80m×短径0.78m×深さ0.18mを測る。底面は凹

第63図　土壙（4）

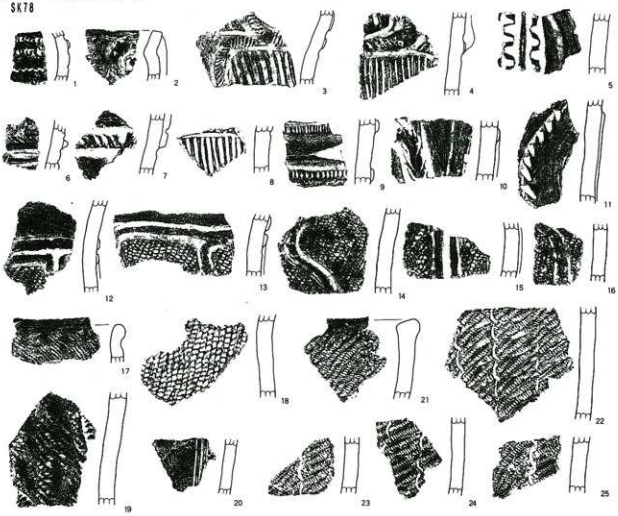

SK53
SK54・55
SK55
SK54
SK56
C4-P19
SK57
SK58
SK59
SK60
C4-P20
SK61
SK62
SK63
SK64
C4-P22
SK65
SK66
SK67
SK68
0
2m
1:60

第64図　土壙（5）

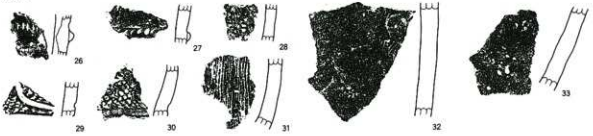

SK69
SK70
SK71
SK72
SK73
SK74
SK75
SK76
SD6
SK77
SD6
SK78
SD6
SK79
1　暗褐色土　焼土粒子、炭化物粒子を少量含む。
2　暗黄褐色土　ローム粒子を多く含む。
SK80
SK81
SJ 8
SK82・83
SK82
SK83
SK84
1　黒褐色土　ローム粒子を含む。
2　黒褐色土　ローム粒子を多く含む。
3　褐色土　ロームブロック
4　黒色土　ロームブロックを含む。
5　褐色土　ロームブロック。
0
2m
1:60

第65図　土壙出土遺物（3）

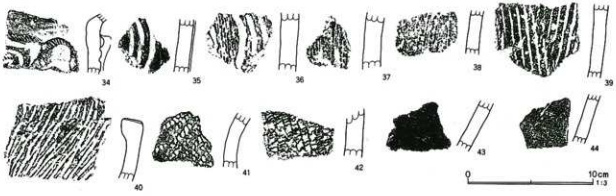
SK78



SK82



SK83



凸があり、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。26は勝坂系土器で、低平な隆帯区画に沿って沈線を施文し、区画内に集合ペン先状結節沈線を施文する。

第53号土壙（第63図、第62図27、28）

B－4区～C－4区にかけて位置する。中･近世のピットと重複し、東側に攪乱を受ける。プランは楕円形で、長径1.15m×短径0.90m×深さ0.12mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。いずれも無文の浅鉢の破片で、27は口縁部付近の破片である。

第54号土壙（第63図、第62図29）

C－4区に位置する。第55号土壙と重複する。プランは楕円形で、長径0.92m×短径0.78m×深さ0.13mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。1は連弧文土器の胴部破片で、単節RL縄文上に弧線文を描く。

第55号土壙（第63図）

C－4区に位置する。第54号土壙と重複し、中･近世のピットによる攪乱を受ける。プランは楕円形で、長径0.95m×短径0.50m×深さ0.09mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第56号土壙（第63図）

C－4区に位置する。中･近世のピットと重複し、西側に攪乱を受ける。プランは長楕円形で、長径1.10m×短径0.65m×深さ0.19mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第57号土壙（第63図）

C－4区に位置する。プランは長楕円形で、長径0.79m×短径0.54m×深さ0.06mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第58号土壙（第63図）

C－4区に位置する。プランは円形で、長径0.60m×短径0.54m×深さ0.20mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第59号土壙（第63図）

C－4区に位置する。プランは円形で、長径0.78m×短径0.64m×深さ0.40mを測る。底面は小さく、壁はすり鉢状を呈する。

第60号土壙（第63図）

C－4区に位置する。中･近世のピットと重複し、北側に攪乱を受ける。プランは円形で、長径0.76m×短径0.68m×深さ0.12mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第61号土壙（第63図、第62図30、31）

C－4区に位置する。多くの中･近世のピットと重複する。プランは長方形で、長径1.18m×短径0.90m×深さ0.13mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。30、31は無文浅鉢の胴部破片の可能性が高い。

第62号土壙（第63図、第62図32、33）

C－4区に位置する。プランは楕円形で、長径1.00m×短径0.85m×深さ0.19mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。32は勝坂系の土器片で、区画隆帯に沿って爪形文と小波状沈線を施文する。33は無文の胴部破片である。

第63号土壙（第63図、第62図34、35）

C－4区に位置する。プランは楕円形で、長径0.80m×短径0.65m×深さ0.13mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。34は口縁が内彎する

無文浅鉢の口縁部破片で、35は無文の胴部破片であるが、浅鉢の可能性が高い。

第64号土壙（第63図）

C－4区に位置する。中･近世のピットと重複し、南側に攪乱を受ける。プランは楕円形で、長径0.82m×短径0.58m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第65号土壙（第63図、第62図36、37）

D－3～4区にかけて位置する。プランは楕円形で、長径0.78m×短径0.60m×深さ0.24mを測る。底面は凹凸があり、壁は比較的直に立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。36は内折する無文の口縁部で、口唇部が角頭状を呈する。37は単節ＲＬ縄文を縦位施文する胴部破片である。

第66号土壙（第63図）

D－4区に位置する。プランは不整楕円形で、長径1.16m×短径0.74m×深さ0.22mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第67号土壙（第63図、第62図38）

D－4区に位置する。プランは楕円形で、長径0.70m×短径0.51m×深さ0.23mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。38は集合沈線文を施文する勝坂系の土器である。

第68号土壙（第63図、第62図39～41）

D－4区に位置する。プランは円形で、長径0.66m×短径0.63m×深さ0.12mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。いずれも勝坂系の土器群で、39は無文の口縁部が彎曲して開く深鉢で、頸部の区画に爪形文を施文する。40は無文の口縁部破片で、41は無文の胴部破片である。

第69号土壙（第64図、第62図42）

D－4区に位置する。プランは楕円形で、長径0.92m×短径0.65m×深さ0.17mを測る。底面はやや凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。42は加曽利Ｅ系のキャリバー形深鉢で、頸部無文帯を持ち、胴部が球状に張る器形を呈す。胴部は半裁竹管の重複施文による3本の平行沈線文で胴部を多段の横位区画し、単節ＲＬ縄文地文上に円形刺突文を全面施文する。

第70号土壙（第64図）

C－5区に位置する。プランは長楕円形で、長径0.97m×短径0.61m×深さ0.08mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第71号土壙（第64図）

D－5区に位置する。プランは円形で、長径0.60m×短径0.58m×深さ0.05mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第72号土壙（第64図）

D－5区に位置する。プランは不整円形で、長径1.09m×短径0.87m×深さ0.18mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

第73号土壙（第64図）

D－5区に位置する。プランは円形で、長径0.75m×短径0.63m×深さ0.06mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第74号土壙（第64図）

E－5区に位置する。プランは楕円形で、長径0.98m×短径0.86m×深さ0.11mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第75号土壙（第64図）

E－5区に位置する。プランは楕円形で、長径0.70

m×短径0.60m×深さ0.12mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第76号土壙（第64図）

E－5区に位置する。第6号溝と重複する。プランは円形で、長径0.70m×短径0.55m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第77号土壙（第64図）

D－6～7区に位置する。第6号溝と重複する。プランは楕円形で、長径1.30m×短径1.08m×深さ0.43mを測る。底面は平坦面で、壁は比較的直に立ち上がる。

第78号土壙（第64図、第65図1～25）

D－6区に位置する。中･近世のピットと重複し、北側に攪乱を受ける。プランは円形で、長径1.08m×短径1.03m×深さ0.54mを測る。底面は平坦面で、壁は比較的直に立ち上がる。

遺物は土器片が多く出土している。1～11は勝坂系の土器群である。1は口縁部破片で、区画隆帯脇に結節沈線を施文し、区画内には横位の小波状結節沈線を施文する。2は口縁部が内彎して開くキャリパー形深鉢の口縁部破片で、隆帯の楕円区画に沿って、2列の結節沈線を施文する。阿玉台系の要素を強く持つ。藤内式段階に比定されよう。

3～11は刻みを施す隆帯で区画、モチーフを描き、隆帯脇に沈線を施文する土器群である。3、4は隆帯の楕円区画内に、集合沈線文を充填施文する。5は2本沈線間に交互刺突文を施文する沈線で、モチーフを描く。10は隆帯上に矢羽状の刻みを施し、11は幅広の低隆帯の肩部分に、刺突状の刻みを施す。以上、井戸尻式段階に比定されよう。

12～16は加曽利E系土器群で、12～15は隆帯で頸部を区画し、単節縄文RL地文上に隆帯の懸垂文を垂下する。12は頸部無文帯を持つ。16は単節縄文RL地文上に蛇行沈線懸垂文を施文する。加曽利EⅠ式新段階に比定されよう。

17は単節LR縄文を施文する口縁部破片で、18は複節RLRを施文する胴部破片である。19は地文に間隔を開けた単節LR縄文を縦位施文し、爪形文でモチーフを描く破片である。20は垂下する隆帯脇に、半截竹管の重複施文による3本平行沈線を施文する。

21は0段多条縄文RLを縦位施文する口縁部破片である。、22～25は同一個体で、0段多条縄文RL地文上に、結節回転の綾繰り文を施文する。

第79号土壙（第64図）

D－6区に位置する。プランは円形で、長径0.78m×短径0.72m×深さ0.12mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第80号土壙（第64図、第62図43、44）

D－6区に位置する。プランは円形で、長径0.59m×短径0.55m×深さ0.11mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。43、44は加曽利E系土器群の胴部破片で、43は磨消縄文を施文する、原体は単節RLの縦位施文である。

第81号土壙（第64図、第62図45、46）

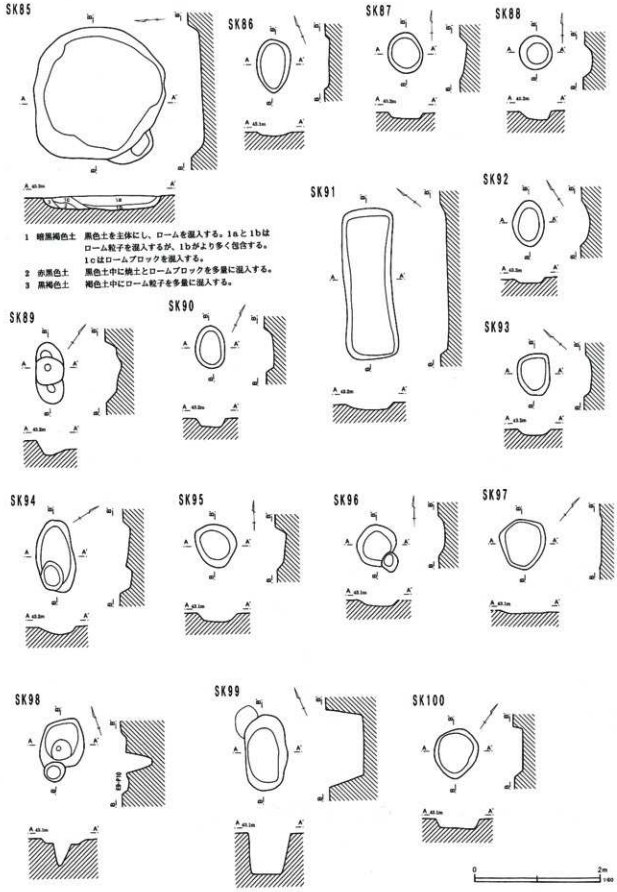
E－6区に位置する。第6号住居跡と重複する。プランは不整円形で、長径0.87m×短径0.43m×深さ0.24mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。45は連弧文土器、46は口縁の開く深鉢で、口縁部区画に2本沈線を施文する。胴部は単節LR縄文を施文する。

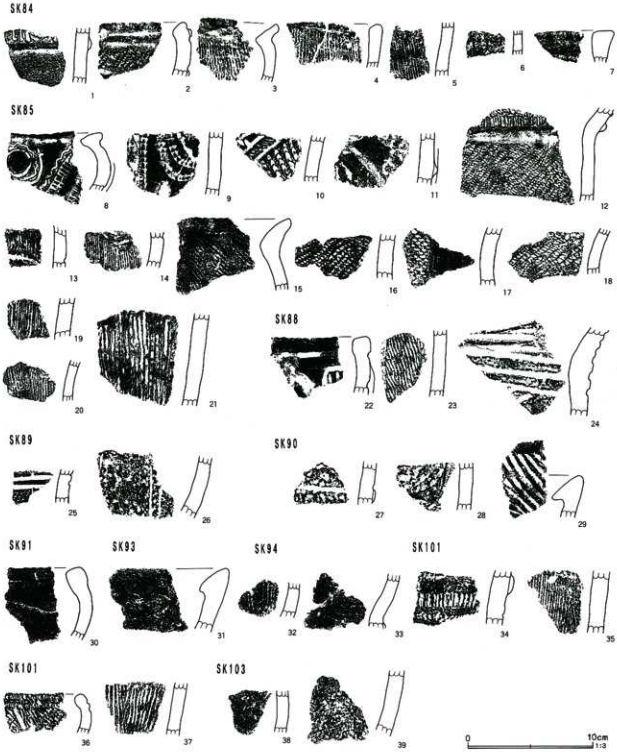
第82号土壙（第64図、第65図26～33）

E－6～7区にかけて位置する。第83号土壙と重複する。プランは長方形で、長径2.42m×短径1.00m×深さ0.19mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

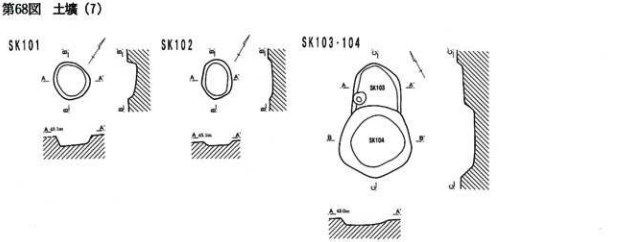
第66図　土壙（6）


SK85
SK86
SK87
SK88
SK89
SK90
SK91
SK92
SK93
SK94
SK95
SK96
SK97
SK98
SK99
SK100
1　暗黒褐色土　黒色土を主体にし、ロームを混入する。1aと1bはローム粒子を混入するが、1bがより多く包含する。1cはロームブロックを混入する。
2　赤黒色土　黒色土中に焼土とロームブロックを多量に混入する。
3　黒褐色土　褐色土中にローム粒子を多量に混入する。
0
2m
1:60

第67図　土壙出土遺物（4）



第68図　土壙（7）



遺物は土器片が出土している。26、27は区画の隆帯脇に爪形文を施すものである。29、30は連弧文土器の胴部破片である。28、31は条線文を施文する胴部破片である。32、33は無文土器の胴部破片である。

第83号土壙（第64図、第65図34～44）

E－6～7区に位置する。第82号土壙と重複する。プランは長方形で、長径2.62m×短径0.98m×深さ0.19mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。34は勝坂系の胴部破片で、隆帯で文様帯を区画し、隆帯上に刻みを施す。35～39は加曽利E系の土器群で、35は2本隆帯でモチーフを描き、36、37は条線地文上に沈線懸垂文を施文する。28は地文に条線文を施文する胴部破片で、39は間隔を開けて撚糸Lを沈線状に施文する。40は曽利系土器で、口縁部に条線状の沈線文を施文する。41は単節RL、42は0段多条RLを施文する胴部破片で、43、44は無文土器である。

第84号土壙（第64図、第67図1～7）

E－6区に位置する。プランは円形で、長径1.57m×短径1.23m×深さ0.33mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。1は勝坂系土器の胴部破片で、隆帯区画まで沈線を垂下する。2～7は加曽利E系土器群である。2は口縁部文様帯の破片で、単節RL縄文を地文にする。3～6は条線を施文する土器群で、3は口縁部が「く」字状に屈曲する。4は口縁部が直上し、5、6は胴部破片である。7は浅鉢の口縁部破片である。

第85号土壙（第66図、第67図8～21）

D－7区に位置する。プランは円形で、長径2.10m×短径2.09m×深さ0.21mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。8～12は勝坂系土器群で、8は口縁部が球状を呈する深鉢の口縁部破片で、隆帯区画に沿って爪形文と小波状沈線を施文するもので、区画内には沈線と小波状沈線を組み合わせての円形モチーフを施文する。9は半截竹管内面の結節沈線を垂下して、文様帯を縦位分割し、区画内に同種の結節沈線で曲線文を施文する。10は交互刺突文を施す平行沈線で区画し、区画内に集合ペン先状結節沈線を充填施文する。11は断面三角の低隆帯で文様帯を区画する。12はキャリパー形深鉢の胴部破片で、文様帯下端部の破片である。口縁部区画隆帯に沿ってキャタピラ

文を施文し、ペン先状結節沈線を沿わせ、胴部に0段多条縄文ＲＬを縦位施文する。8、9、12は藤内式段階に比定されよう。

13、14は条線施文上に沈線の弧線文を施文する連弧文土器である。17は胴部に幅広の磨消懸垂文を垂下するもので、地文は単節ＬＲである。15は口縁部が屈曲して開く口縁部破片で、単節ＬＲを縦位施文する。16、18は胴部破片で、単節ＲＬを縦位施文する。19、20は条線文を、21は撚糸Ｌを施文する胴部破片である。

第86号土壙（第66図）

Ｄ－７区に位置する。プランは楕円形で、長径0.83ｍ×短径0.52ｍ×深さ0.08ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第87号土壙（第66図）

Ｅ－７区に位置する。プランは円形で、長径0.52ｍ×短径0.50ｍ×深さ0.11ｍを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

第88号土壙（第66図、第67図22～24）

Ｅ－７区に位置する。プランは円形で、長径0.52ｍ×短径0.51ｍ×深さ0.16ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。22～24は加曽利Ｅ系土器群で、22はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。低隆帯の楕円区画内に、集合沈線を施文する。23は沈線懸垂文を垂下する胴部破片で、地文に無節Ｌを施文する。24は連弧文土器の胴部区画部分の破片である。

第89号土壙（第66図、第67図25、26）

Ｅ－７区に位置する。プランは長楕円形で、長径0.95ｍ×短径0.45ｍ×深さ0.25ｍを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。25、26は加曽利Ｅ系のキャリパー形深鉢の胴部破片で、25は胴部区画沈線から沈線懸垂文が垂下する。26は底部近くの破片で、沈線文が垂下する。

第90号土壙（第66図、第67図27～29）

Ｅ－７区に位置する。プランは楕円形で、長径0.67ｍ×短径0.47ｍ×深さ0.15ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。27、28は器面の荒れが著しいが、27は区画隆帯上に刻みを施し、28は沈線懸垂文と地文沈線を施している。29は口縁部内端が突出する曽利系深鉢の口縁部破片で、口縁部と、口唇上に沈線を施す。

第91号土壙（第66図、第67図30）

Ｅ－７区に位置する。プランは長方形で、長径2.39ｍ×短径0.73ｍ×深さ0.32ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。30は内彎する無文の口縁部が開くキャリパー形深鉢の口縁部破片である。浅鉢の口縁部である可能性もある。

第92号土壙（第66図）

Ｄ－８区に位置する。プランは円形で、長径0.75ｍ×短径0.48ｍ×深さ0.15ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第93号土壙（第66図、第67図31）

Ｄ－８区に位置する。プランは楕円形で、長径0.67ｍ×短径0.52ｍ×深さ0.13ｍを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。31は口唇部内端が突出し、無文の口縁部が開く器形である。

第94号土壙（第66図、第67図32、33）

Ｅ－８区に位置する。プランは長楕円形で、長径1.12ｍ×短径0.55ｍ×深さ0.32ｍを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。32は条線を施文する

胴部破片で、33は隆帯で無文の口縁部を区画する胴部破片である。

第95号土壙（第66図）

E－8区に位置する。プランは円形で、長径0.69m×短径0.60m×深さ0.15mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第96号土壙（第66図）

E－8区に位置する。中･近世のピットと重複し、南側に攪乱を受ける。プランは円形で、長径0.65m×短径0.64m×深さ0.12mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第97号土壙（第66図）

E－8～9区にかけて位置する。プランは円形で、長径0.80m×短径0.69m×深さ0.03mを測る。底面は皿状を呈し、壁は緩く立ち上がる。

第98号土壙（第66図）

E－9区に位置する。中･近世のピットと重複し、南側に攪乱を受ける。プランは楕円形で、長径0.75m×短径0.68m×深さ0.50mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

第99号土壙（第66図）

E－8区に位置する。中･近世のピットと重複し、北側に攪乱を受ける。プランは楕円形で、長径1.23m×短径0.60m×深さ0.59mを測る。底面は平坦面で、壁はやや直に立ち上がる。

第100号土壙（第66図）

E－8区に位置する。プランは楕円形で、長径0.80m×短径0.68m×深さ0.15mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第101号土壙（第68図、第67図34～37）

E－8区に位置する。プランは円形で、長径0.59m×短径0.54m×深さ0.17mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。34、36は勝坂系の深鉢で、34は区画隆帯脇にキャタピラ文と三角押文を施文する。36は内彎して開く口縁部に、三角押文で三角区画を施すもので、地文に無節Lを施文する。新道式から藤内式にかけての所産と思われる。35は条線文を、37は撚糸Lを施文する胴部破片である。

第102号土壙（第68図）

E－8区に位置する。プランは楕円形で、長径0.63m×短径0.44m×深さ0.07mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

第103号土壙（第68図、第67図38、39）

F－8区に位置する。第104号土壙と重複する。プランは長楕円形で、長径0.75m×短径0.67m×深さ0.09mを測る。底面は平坦面で、壁は緩く立ち上がる。

遺物は土器片が出土している。38、39とも無文の胴部破片である。

第104号土壙（第68図）

F－8区に位置する。第103号土壙と重複する。プランは円形で、長径1.15m×短径1.11m×深さ0.49mを測る。底面は凹凸があり、壁は緩く立ち上がる。

番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
1	A 2	99	(60)	17
2	A 2	103	63	14
3	A 2	70	(65)	15
4	B 2	62	53	7
5	B 2	130	65	20
6	B 2	123	93	15
7	B 2	107	90	18
8	B 2	60	48	17
9	B 2	63	57	16
10	B 2	(102)	70	18
11	B 2	112	90	25
12	B 2	97	70	12
13	B 2	57	(50)	10
14	B 2・C 2	70	55	12
15	B 2・C 2	(150)	103	13
16	C 2	72	(39)	10
17	C 2	60	48	13
18	C 2	65	45	13
19	C 2	97	60	90
20	C 3	55	43	22
21	B 3・B 4	175	95	10
22	C 2・D 2	85	72	19
23	D 2	155	76	11
24	B 3	77	70	139
25	B 3	66	55	11
26	B 3	125	55	17
27	C 3	110	(63)	43
28	B 3	95	95	32
29	C 3	114	35	14
30	C 3	100	95	19
31	C 3・C 4	75	62	18
32	C 3・C 4	(50)	38	15
33	C 3	86	47	11
34	C 3	65	(50)	11
35	C 3	135	130	31
36	C 3	154	67	11
37	C 3	95	90	22
38	C 3	48	(47)	11
39	C 3	79	50	11
40	C 3	73	34	18
41	C 3	81	56	12
42	D 3	165	113	42
43	D 3	125	88	18
44	D 3	83	82	14
45	D 3	(115)	85	6
46	D 3	147	(136)	15
47	D 3	(107)	93	16
48	D 3	115	(46)	27
49	B 4	220	105	50
50	B 4	60	55	15
51	B 4	80	60	17
52	B 4	180	78	18
53	B 4・C 4	115	90	12
54	C 4	92	78	13
55	C 4	95	(50)	9
56	C 4	110	65	19
57	C 4	79	54	6
58	C 4	60	54	20
59	C 4	78	64	40
60	C 4	76	68	12
61	C 4	118	90	13

番号	位置	長径(cm)	短径(cm)	深さ(cm)
62	C 4	100	85	19
63	C 4	80	65	13
64	C 4	82	58	11
65	D 3・D 4	78	60	24
66	D 4	116	74	22
67	D 4	70	51	23
68	D 4	66	63	12
69	D 4	92	65	17
70	C 5	97	61	8
71	D 5	60	58	5
72	D 5	109	87	18
73	D 5	75	63	6
74	E 5	98	86	11
75	E 5	70	60	12
76	E 5	70	55	11
77	D 6・D 7	130	(108)	43
78	D 6	108	103	54
79	D 6	78	72	12
80	D 6	59	55	11
81	E 6	87	43	24
82	E 6・E 7	242	100	19
83	E 6・E 7	262	(98)	19
84	E 6	157	123	33
85	D 7	210	209	21
86	D 7	83	52	8
87	E 7	52	50	11
88	E 7	52	51	16
89	E 7	95	45	25
90	E 7	67	47	15
91	E 7	239	73	32
92	D 8	75	48	15
93	D 8	67	52	13
94	E 8	112	55	32
95	E 8	69	60	15
96	E 8	65	64	12
97	E 8・E 9	80	69	3
98	E 9	75	68	50
99	E 8	123	60	59
100	E 8	80	68	15
101	E 8	59	54	17
102	E 8	63	44	7
103	F 8	75	(67)	9
104	F 8	115	111	49

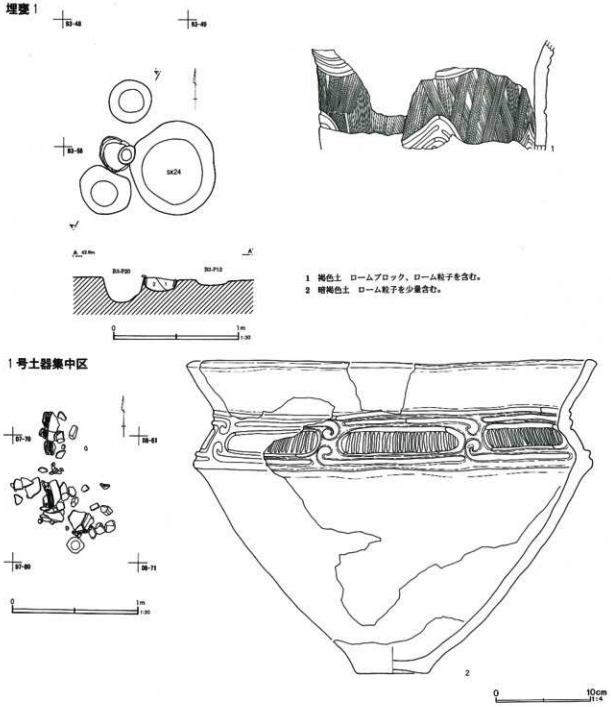
5　埋甕

第1号埋甕（第69図1）

B－3区内から、埋甕が1基検出された。単独の埋甕とは思われないが、周囲に住居跡状の付属施設が見つからないため、埋甕として処理した。第96図1は連弧文土器の胴部のみ現存するもので、入り口部埋甕の可能性が高い。

1は胴部の区画を持たずに、上半部と下半部に、4～5本の沈線で連弧文を描くものである。地文は条線文であるが、やや格子目状に施文している。最大径26cm、現存高11.6cmを測る。

第69図　第1号埋甕・第1号土器集中区



6　土器集中区

第1号土器集中区（第69図2）

D－7～8区にかけて、土器片が集中して出土する地点があった。特に、第69図2は1個体分が纏まって出土している。周辺に縄文時代の遺構の痕跡はなく、特徴的な出土傾向も示していなかった。

2は口縁部と胴部が「く」字状に屈曲し、無文の口縁部が開く器形の浅鉢である。胴部の文様帯には、低隆帯による楕円区画を8単位に施し、上下に巻き込む小さな渦巻文で区画の上下を縁取り、隆帯に沿って沈線を施文する。区画内は集合沈線を充填施文する。加曽利EⅡ式段階に比定されよう。

7　溝

第1号溝（第70図）

A－3区～C－2区にかけて存在する。第1号住居跡、及び多くの中・近世ピットと重複する。調査区内ではほぼ北東方向に掘られており、断面形状は箱掘り状を呈する。土層断面の観察から、何度かにわたって掘り直されている様子が窺える。主だった遺物の出土はないが、溝の形状等から、中世の所産と推定される。

第2号溝（第71図）

C－5区～D－2区にかけて存在する。D－5区で第3号溝と重複する。遺構確認段階で、第3号溝が明瞭であったことから、第2号溝の方が古いと判断される。調査区内ではクランク状に蛇行しながら北東方向へと走り、断面形状は箱薬研掘り状を呈する。土層断面の観察から、溝の形状が最終形態であることが把握される。中世から近世にかけての所産と推定される。

第3号溝（第71図、第73図13）

C－5区～D－4区にかけて存在する。第2号溝とはD－5区で分岐する。溝はほぼ北東方向へ走るが、調査区の南側へ行くほど浅く、北側へ向かって掘り込みが深くなる。覆土から第73図13の陶器が出土した。13は瀬戸焼の鉢で、片口になる可能性がある。底部の約半分が現存し、推定底径11.2cm、現存高3.8cmを測る。18世紀代の所産と推定される。

第4号溝（第70図）

C－6区～D－5区にかけて存在する。第5号溝と重複し、D－5区で分岐する。非常に浅い溝で、第5号溝との新旧関係は不明であるが、地割状の溝と思われ、近世及びそれ以降の所産と推定される。

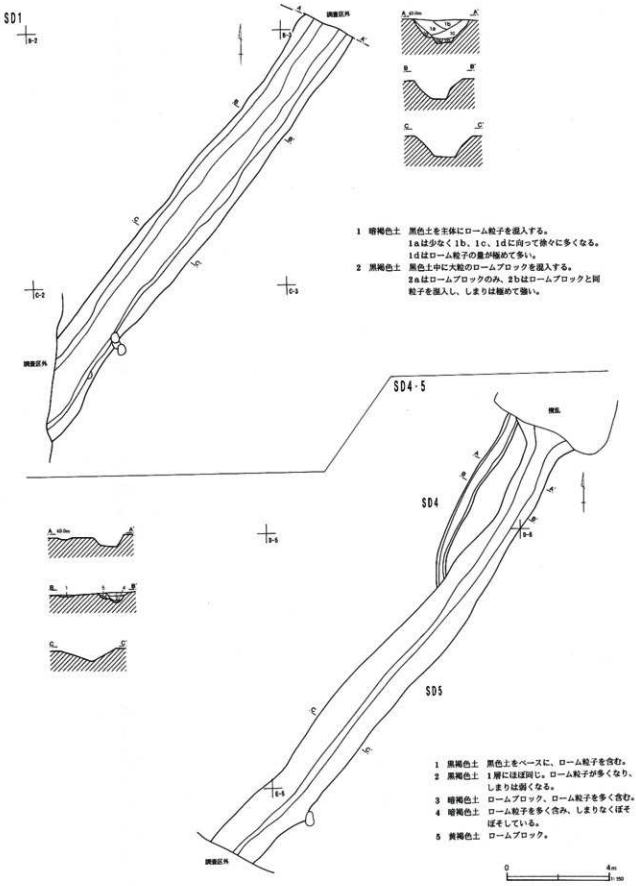
第5号溝（第70図）

C－6区～E－4区にかけて存在する。第4号溝と重複するが、新旧関係は不明である。調査区内ではほぼ北東方向に走る。断面形状は一定化しておらず、何度も掘り直しが行われ、地割状を呈する。遺物の出土はないが、溝の形状等から、近世及びそれ以降の所産と推定される。

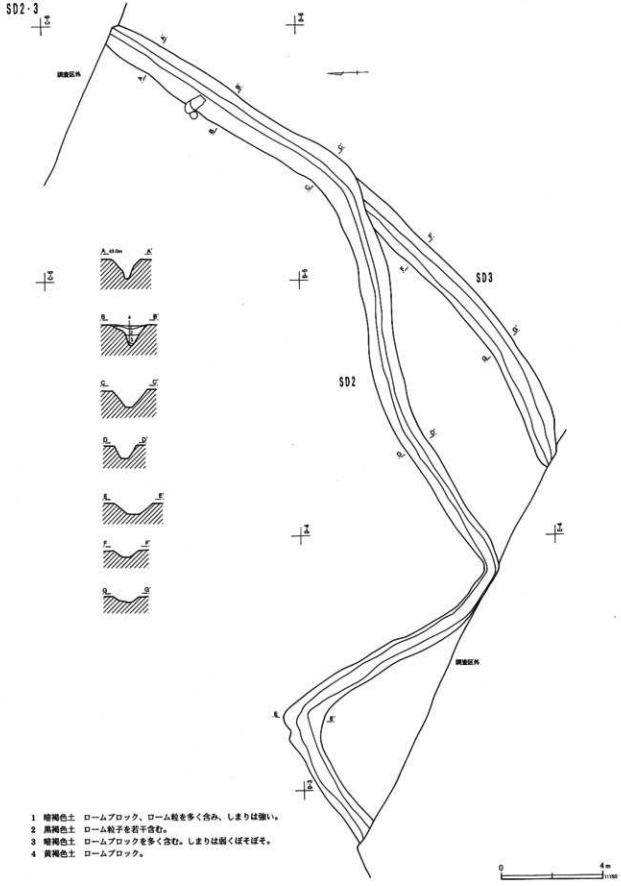
第6号溝（第72図、第73図1～6、9、11、12）

C－7区～E－5区にかけて存在する。ほぼ北東方向へ走り、北へ向かって掘りが深くなる。溝の幅は約4m程で、最も深いところで地方面から2.23mの深さを測る。溝の断面形態は幅広の薬研掘り状を呈し、現在でも完全に埋没しておらず、溝の痕跡を残している。土層断面の観察から、何度も掘り直しが行われており、最終段階の掘り込みが現在残されており、近日まで堀としての機能を有していたものと推測される。遺物は溝の底部付近から出土しており、古代から中世の遺物が多く含まれる。縄文土器については、グリッド出土の扱いにした。溝はその形状や、出土遺物から中世の

第70図　溝（1）

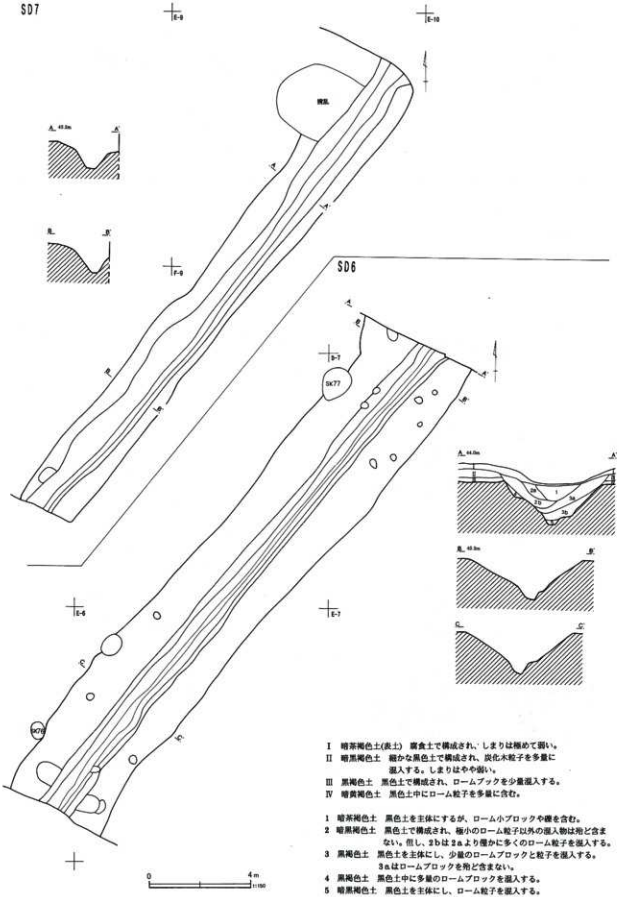

SD1
調査区外
1　暗褐色土　黒色土を主体にローム粒子を混入する。
1aは少なく1b、1c、1dに向って徐々に多くなる。
1dはローム粒子の量が極めて多い。
2　黒褐色土　黒色土中に大粒のロームブロックを混入する。
2aはロームブロックのみ、2bはロームブロックと同粒子を混入し、しまりは極めて強い。
SD4・5
SD4
SD5
1　黒褐色土　黒色土をベースに、ローム粒子を含む。
2　黒褐色土　1層にほぼ同じ。ローム粒子が多くなり、しまりは弱くなる。
3　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒子を多く含む。
4　暗褐色土　ローム粒子を多く含み、しまりなくぼそぼそしている。
5　黄褐色土　ロームブロック。
0
4m
1:150

第71図　溝（2）



1　暗褐色土　ロームブロック、ローム粒を多く含み、しまりは強い。
2　黒褐色土　ローム粒子を若干含む。
3　暗褐色土　ロームブロックを多く含む。しまりは弱くぼそぼそ。
4　黄褐色土　ロームブロック。

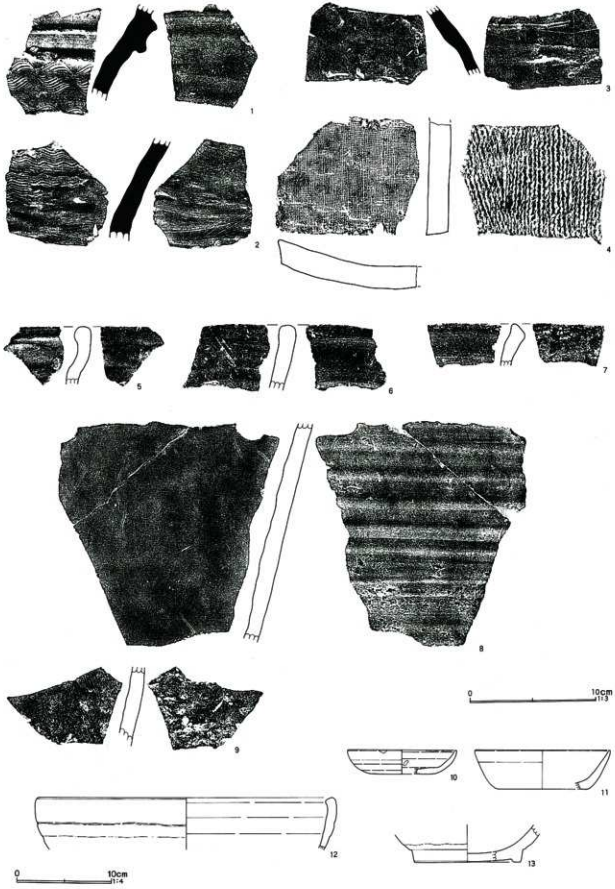
第72図　溝（3）



Ⅰ　暗茶褐色土(表土)　畑食土で構成され、しまりは極めて弱い。
Ⅱ　暗黒褐色土　微かな黒色土で構成され、炭化木粒子を多量に混入する。しまりはやや弱い。
Ⅲ　黒褐色土　黒色土で構成され、ロームブックを少量混入する。
Ⅳ　暗黄褐色土　黒色土中にローム粒子を多量に含む。

1　暗茶褐色土　黒色土を主体にするが、ローム小ブロックや礫を含む。
2　暗黒褐色土　黒色土で構成され、極小のローム粒子以外の混入物は殆ど含まない。但し、3bは3aより僅かに多くのローム粒子を混入する。
3　黒褐色土　黒色土を主体にし、少量のロームブロックと粒子を混入する。3aはロームブロックを殆ど含まない。
4　黒褐色土　黒色土中に多量のロームブロックを混入する。
5　暗黒褐色土　黒色土を主体にし、ローム粒子を混入する。

第73図　溝出土遺物



所産と思われる。

1～4は平安時代の遺物である。1～3は須恵器甕の破片で、1、2は頸部破片、3は肩部の破片である。1は口縁部に2条の凸帯を持ち、櫛歯の波状文を施文する。2は頸部下部の破片で、波状文の波形が緩くなる。4は布目瓦の平瓦の破片で、縄の叩き目が残る。いずれも9世紀代に位置付けられるものと思われる。

5、6、9、11、12は中世の遺物である。9は常滑の甕の胴部破片である。5は内耳付土鍋の、6は鉢の口縁部破片である。11は小破片からの復元図であるため、口径の誤差はあるものと思われるが、やや径の大きいかわらけである。12は焙烙の口縁部破片で、推定径31.6cm、現存高5.6cmを測る。5、6、11は15世紀代、12は18世紀代の可能性が高い。

第7号溝（第72図、第73図8）

E－9区～F－8区にかけて存在する。東側の調査区に沿って北東方向に走り、第8号溝と平行して存在する。溝の断面形状は箱掘り状を呈し、何度かにわたって掘り直されている様子が窺える。出土遺物から近世もしくはそれ以降の所産と推定される。

8は土鍋の破片で、口縁部と底部を欠損する。器面に指頭整形痕がなくなり、轆轤整形痕が顕著に認められる等、近世もしくはそれ以降の時期に比定される可能性が高い。

8　ピット状遺構

調査区内からは、いわゆるピットと呼ばれる小穴遺構が多数検出された。これらのピットは、縄文時代、平安時代、中・近世及びそれ以降の時代に構築されたもので、本来、単独もしくは組列を成して何らかの機能を有していたものと考えられる。

しかし、調査後においてその組列を把握しきれないものを対象としてピットと総称しているに過ぎず、なお本来的な機能の追及を続ける必要がある。従って、ここでは検出されたピットを、出土遺物とともに全て掲載し、グリッドごとに纏めることとした。

ピットは総じて、調査区西半分の区域に多く検出されている。東半分の区域では、掘立柱建物跡が集中する区域に顕著に認められる傾向がある。

調査区西半分は縄文時代の住居跡の分布区域となり、削平されてしまった住居跡や、未検出の住居跡が存在する可能性が高い。また、住居跡と重複しない区域、例えば環状集落の中央部、もしくはその一部では、掘立柱建物跡が存在する可能性もある。この区域では縄文土器を出土するピットが多く分布し、幾つかは確実に縄文時代所産のものがある。従って、ピットの中の一部は、組列を復元できないが、それらを構成する可能性が高いのである。

また、掘立柱建物跡が集中する地域では、ピットからの縄文土器の出土率が低くなり、掘立柱建物跡と同時期のピットが存在している可能性が高くなる。その中には、抽出しきれなかった掘立柱建物跡のピットが含まれているものと思われる。

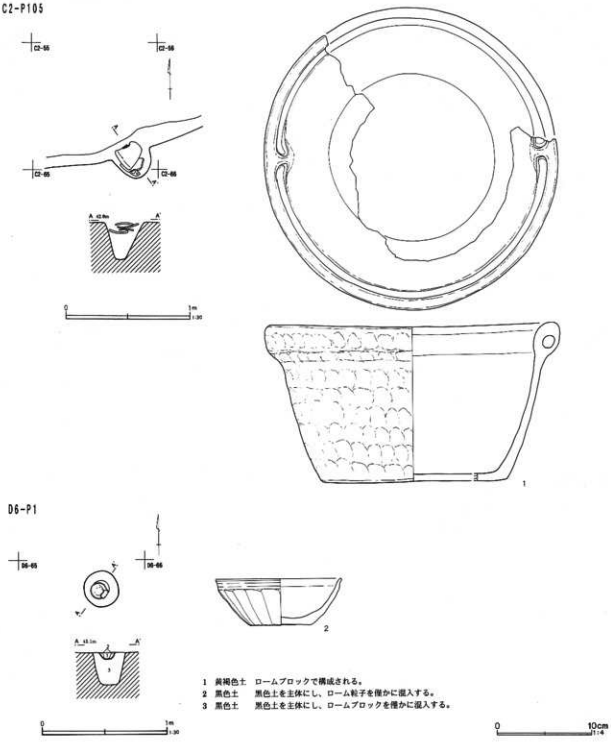
C2－P105（第74図1、第79図）

C－2区に位置する。第1号住居跡の南壁部分に重複する。ピット上層部に内耳鍋の破片が一括して出土した。このピットの存在する付近は、第6号・第7号掘立柱建物跡が重複して存在する。このピットも何れかの建物跡に伴うものと判断される。出土の内耳鍋がおよそ15世紀代の所産と推測されることから、この周辺の掘立柱建物跡もこれに近い年代が与えられるものと思われる。

1は口縁部の内側に幅広の溝状整形を施し、この溝部分に耳状の把手が2ヶ所に付くものと思われる。約3分の2程が現存し、推定口径29cm、現存高16.8cmを測る。15世紀後半の所産と思われる。

D6－P1（第74図2、第89図）

D－6区に位置する。ピット確認面に、ほぼ完形の土師器椀が正位に設置された様な状態で検出された。周辺には該期の遺構はなく、第6号溝が東側に存在する。第6号溝からも平安時代の遺物が出土していることから、この周辺に古代の遺構が存在していた蓋然性が高い。

2は土師器椀で、完形である。低部は平底に整形され、体部には縦位のヘラ削りが認められる。口径13.4cm、底径6.6cm、器高4.8cmを測る。

第74図　ピット状遺構（1）